新定女子國文

改訂版

巻九

375.9
Yo19
資料室

42301
教科書文庫
4
810
42 - 1933
200030183 5

資料室
375.9
Y019

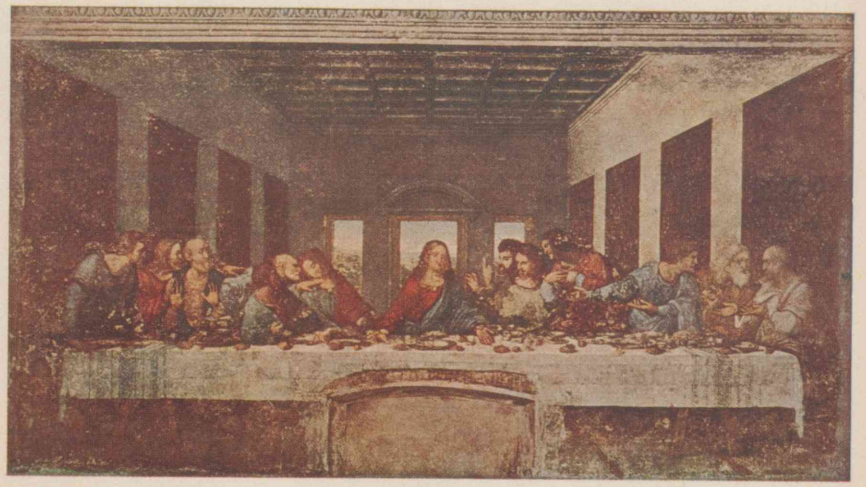
昭和八年一月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科

吉田彌平編

新定女子國文 卷九

改訂版

金港堂書籍株式會社



最後の晩餐

（レオナルド・ダ・ヴインチ筆）

廣島大學圖書之印

広島大学
教
37747
図書

新定女子國文　卷九

目次

一　國文學の精神……久松潛一……一
二　草枕……夏目漱石……三
三　馬追三吉……近松門左衞門……二〇
四　世界の借家大將……井原西鶴……三一
五　草雙紙……市島春城……三八
六　山吹の花……四八
七　幻住庵の記……松尾芭蕉……五六

八　生活の興味……岩城準太郎……六〇
九　苔清水……横井也有……七六
一〇　百蟲譜……矢代幸雄……八一
一一　レオナルドに逢ふ日……横山有策……八八
一二　藝術家……芳賀矢一……九六
一三　月雪花……賀茂眞淵……一〇四
一四　岡部日記……本居宣長……一〇九
一五　おのが物まなびのありしやう……村田春海……一一四
一六　芳宜園大人の靈を祭る……上田秋成……一二八
一七　月の前……北村透谷……一三四
一八　山庵雜記……西田幾多郎……一二八
一九　愚禿親鸞……島崎藤村……一三一
二〇　嵐の後……和辻哲郎……一四五
二一　家

廣島大學圖書之印

新定女子國文　卷九

久松潛一
國文學者
東京帝國大學助教授
明治二十七年愛知縣
知多郡生

一　國文學の精神

久松潛一

國文學の精神は何であるか。或は月花をめでるといふ、優美な意味に取られてゐる場合も多いであらう。しかし、よく考へて見れば、もつと生活的意味の深い種々の方面があるに相違ない。私はこゝに國文學を流れる精神として、まことと、もののあはれと、幽玄といふ三つの點について考へて見ようと思ふ。

第一にまことの精神とは、あるがまゝのもの卽ち事實をあるがまゝに表現する精神を中心としてゐる。これが上古の國文學

を貫く精神であると見られると思ふ。これを內容的・思潮的方面から見ると、そこに强い國家的精神と個人的精神とが現れてゐる。國家的精神は古事記を中心として見られる精神で、この國家は神によつて作られ、宇宙も人類も亦神によつて作られたと見るのであつて、神を中心として生きる精神である。同じ神の中に自然神もあり、人格神もあり、人格神の中に英雄神もあり、祖先神もあり、色々であるが、何れにしても、自己より偉大なる神によつて生きる精神は、古代人の眞實なる心もちのまゝ古事記に表現されてゐるのである。もとよりそこには想像もあり、超現實的なことも多いのであるが、後世の如く意識的に創作したものでなく、彼等に眞實なものとして映じたものがそのまゝに傳はつてゐるのである。

人麿
柿本氏
持統文武兩帝の御代の歌聖
皇子
天武天皇の御子草壁皇子高市皇子など

さてまた萬葉集の中心となる精神は個人的の精神であると思ふ。人麿は國家の建設を說き、神を歌つてゐるが、その中心は皇子の薨去をいたむ哀痛の感情にある。かくて一方には自然に只管なる愛をむけるやうになり、自然の中に身を投入れて、そこに自己と自然との一つになつた境地が見られる。また一方には人生に向つて情熱的な愛をうたひ、或はこの人生の享樂すべきをうたひ、或ははかなき世であつても、現實にある間は現實をよりよく生きていかうとする、强い現實に發する愛をうたつてゐるのである。

この素樸な、まことの感情を中心とする上代人の物の見方を見つめていくと、第一に一元的・綜合的である。神と人、自然と人を一つのものとしてながめる。第二に率直にして積極的である。

見方が單純で、迂餘曲折がない。第三に物を觀察するに多く具象的である。歌を詠むにも、目に觸れた事象を先づうたふ。對象をあるがまゝに直觀し、これを直接的に表現するのである。而してこの精神は、文化が爛熟したとき、復古的精神として常に現れて來るのである。復古的精神とは單に文字通り古に復るのではない、古代人の眞實性と素樸性とに復ることがその精神である。例へば平安末期に於て、現實生活に頽廢と行きづまりとを生じたとき、實朝は萬葉集の精神に復つてその素樸性と眞實性とを求めたのであると思ふ。かくて實朝の心境を見ると、一方には國家的精神が現れてゐる。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも

實朝
源氏
鎌倉三代の將軍
承久元年(一八七九)薨
年二十八

一方には人間的な愛の精神が現れてゐる。

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母をたづぬる

又自然をうたふにしても、實朝の歌は萬葉時代のやうにありのまゝを見つめる、そしてありのまゝに表現するといふ態度が現れてゐる。

第二に、もののあはれの精神は、ものの中に見出したあはれの精神である。あるがまゝのものの上に見出した、あるべき世界である。それは心と形との調和の中に見出される情熱の世界であるともいへる。本居宣長は、もののあはれを源氏物語の基調であるとし、又平安時代文學の基調としてゐる。それは上古文

本居宣長
國學四大人の一
伊勢國松阪生
享和元年(一八〇一)薨
年七十二

學の中に見える素樸な感情ではなく、それをあくまで洗煉した境地である。あるがまゝのものから、あるべきものを見出し、それを高揚せしめた境地である。高天原の岩戸の前の神樂に「あはれ、あなおもしろ、あなたのし。」とある「あはれ」である。隨つてそれは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕の寂しさの感情にも見出される。この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。これを歌の上に見るに、平安時代の歌は萬葉時代のやうに感情を直接的に表現するより、それを反省する所から、理智的傾向になる點がある。隨つて、强烈なる感情を沈靜にし、情趣化する事にもなる。古今集の歌がそれである。そこに素樸的から技巧的な點も生ずると思ふ。平家物語は敍事詩的の物語であるが、勇壯な戰鬪の間を色どつて流れてゐるものは、もののあはれの精神である。そしてそこに華やかな、勇壯な悲壯美を形づくつてゐると思ふ。

第三に、幽玄の精神を考へて見たい。古今集の眞名序に「或事關神異、或興入幽玄」とあつて、本來はもののあはれとほゞ相近い意味であるが、平安末期の世相の轉變から人生の無常を觀じ來り、宗教的の考が深く入込んで、物寂しい境地を主とするやうになつた。俊成が得意な歌として、

ゆふされば野邊の秋風身にしみてうづらなくなり深草の里

を擧げたと傳へられる點から見ても、その邊の消息がわかるであらう。西行が自然の中に放浪する事によつてその靜寂の境

俊成
歌人
藤原氏
皇太后宮大夫
千載集の撰者
元久元年（一八六四）薨
年九十一

西行
歌僧
俗名佐藤義清
建久元年（一八五〇）寂
年七十三

地を見出して來たのも、それである。美しく咲く櫻の花かげにひそむ靜けさ、寂しさを見出したのが西行であつたと思ふ。而してその幽玄は俊成のよくいふ遠白い卽ち壯大といふ感情と、心が細い卽ち纖細といふ情趣とを結びつけ、統一した中に見出される精神である。

而してこの精神は、一歩進めて考へると、近古文學を流れる傳統的精神や、個人を否定して普遍の中に生きようとする精神と一致するものがあると思ふ。卽ち文學を個性的にそのまゝ表現せず、これを傳統の型の中に入れて、そこからいぶしにかけた上で表現するのである。大きな自由の精神を、型といふ窮屈な狹いものの中に入れ、それを凝縮し結晶せしめて、そこから水晶のやうな透明なものを作り出さうとするのである。これは徒然

草に見える道といふ事によつてもわかる。愚にして愼めるは巧にしてほしいまゝなるにまさるといふのは、畢竟、道は一つの型の中に入れて精煉して始めてすぐれたものとなると考へたのである。そこに專門家を敬する心持が出で、型の文學或は道の文學を重んずる心持が生ずる。この型の中に入れる事によつて、その小さい我の否定された中から現れて來る大きな自然、こゝに幽玄が現れて來ると思ふ。茶にしても、庭にしても、型の中に入つて、しかも型に捉はれない自由な境地を見出して來るのではあるまいか。それは最も小さいものの中にある最も大いなる生活である。而してこれは室町時代の藝術を代表する能樂に於てもさうである。一つの型の中に入れて、その中に普遍的な人間性をあらはさうとしてゐる。非家では到底味はふ

世阿彌
觀世元清
室町時代に能を大成した天才
康正元年(三二五)歿
年八十一

芭蕉
江戸時代の俳聖
松尾氏
伊賀國上野生
元祿七年(三五四)歿
年五十一

ことの出來ない境地である。世阿彌のいふ幽玄の精神も、やはりそこにあると思ふ。この幽玄は、近世文學に於ては、更に芭蕉の閑寂の精神ともなつてゐる。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質をさびであると見たのみならず、このさびに徹して、さびを生活の上に見出して來てゐる。「高く心をさとりて俗にかへるべし。」といふのは、生活をさび化し、幽玄化する事であると解せられる。かくの如くにして、自然と人生との窮極であるところのさびや幽玄は、又藝術の窮極でもあつたのである。

あるがまゝのものに理念を見出した境地がまことであり、あるがまゝのものの中から、あらうとするものを見出して表現したものがものあはれであり、更に自然と人生と藝術とを結びつけて、それをいぶしにかけて、統一せしめ、結晶せしめた大白光の如き境地が幽玄であらう。童のやうな素樸さから華やかな境地となり、そしてさびに達するのである。

かくの如く見るとき、まことともののあはれと幽玄とは一見異なつた理念のやうで、しかも本質的な相違ではなく、展開のそれぞれの過程である。まことが童心と素樸との藝術を生み出し、もののあはれが心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に幽玄がすべての大きな自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光としてあらはさうとする、或點からいへば象徴的な藝術を生み出したかと思ふ。而して、是等の展開流動する精神を統一したもの、そこに國文學の本質が見出されるであらう。（上代日本文學の研究）

夏目漱石
英文學者
小說家
名は金之助
大正五年歿
年五十

足の下で
雲雀より上にやすらふ峠かな　（芭蕉）

二　草枕

夏目漱石

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えぬ。只聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて居たゝまれない樣な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もない。長閑な春の日を、鳴き盡くし、鳴き明かし、また鳴き暮さなければ、氣が濟まぬと見える。其の上、何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、只聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。巖角は鋭く廻つて按摩なら眞逆樣に落ちる

十文字に
時鳥鳴くや雲雀と十文字　（去來）

所を、際どく右へ切れて横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛揚つて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀が、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

書齋に於ける夏目漱石

春は眠くなる。猫は鼠を取ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いた時に、魂

シェレー
Shelley
(1792—1822)
英國の詩人

のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で、覺えた所だけ諳誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其の二三句のなかに、こんなのがある。

前を見ては、後を見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。
腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。
美しき極みの歌に、悲しさの極みの想、籠るとこそ知れ。

成程、いくら詩人が幸福でもあの雲雀の樣に思ひ切つて一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。

詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に、神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。それならば、詩人になるのも考へものだ。

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に、時々蒲公英を踏みつける。鋸の樣な葉が遠慮なく四方へ伸して、眞中に黃色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと振りむいて見ると、黃色な珠は依然として鋸の中に鎭座して居る。暢氣なものだ。又考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦しみもない。菜の花を見ても、只、嬉しくて胸が躍

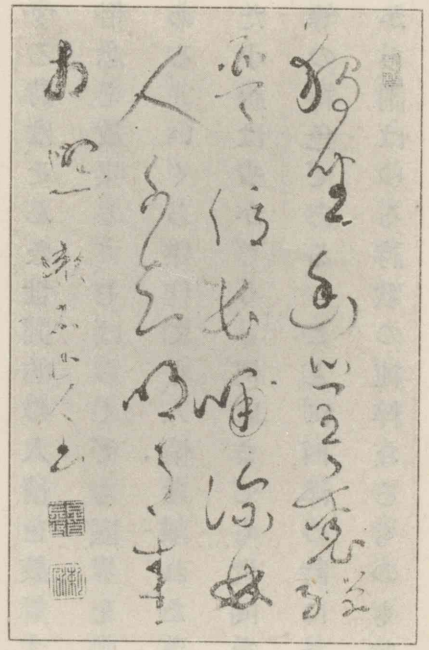
るばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も――櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て、自然の景物に接すれば、見るもの、聞くもの面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。併し、苦しみのないのは、何故だらう。只此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只此の景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬ此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力は、こゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽き〳〵した。飽き〳〵した上に、芝居や小說で同じ刺戟をくりかへしては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絕した小說は少からう。何處までも世間を出る事が出來ぬのが、彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから、謂はゆる詩歌の純粹なるものも、此の境を解脫することを知らぬ。何處までも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を驅けあるいて錢の勘定を忘れるひま

がない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも、無理ではない。嬉しい事に、東洋の詩歌は、そこを解脱したのがある。

菊ヲ東籬ノ下ニ採リ晉の陶淵明の句

菊ヲ東籬ノ下ニ採リ、悠然トシテ南山ヲ見ル。



夏目漱石筆

獨リ幽篁ノ裏ニ坐シ唐詩選にある王維の詩

獨リ幽篁ノ裏ニ坐シ、琴ヲ彈ジ復長嘯ス。

只それぎりの裏に、暑苦しい世の中を、まるで忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣の人が覗いてゐる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と、出世間的に、利害得失の汗を流し去つた心持になれる。

不如歸　徳富蘆花の作

金色夜叉　尾崎紅葉の作

桃源　秦の亂を避けた人の隱れた村といふ　支那湖南省湘潭の近く

王維　盛唐の詩人（皇紀一三五九—一四一九）

淵明　陶潛の字　晉の詩人隱逸（皇紀一〇三五—一〇八七）

Faust　ファウスト　ゲーテの作

深林人知ラズ。明月來リテ相照ラス。

只二十字のうちに、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功徳は、「不如歸」や「金色夜叉」の功徳ではない。汽車・汽船・權利・義務・道徳・禮儀で疲れ果てた後凡てを忘却して、ぐつすり寐込む樣な功徳である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵暢氣な扁舟を浮べて此の桃源に溯るものはない樣だ。余は固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を、今の世に布敎して擴げようと云ふ心懸けも何にもない。只自分には、かういふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも樂しみになるやうに思はれる。ファウ

ハムレット　Hamlet　シェクスピヤの作

近松門左衛門　元祿時代の大戲曲家　本名は杉森信盛　巢林子と號す　享保九年（一三八四）歿　年七十二

五十三次　江戸から京へ東海道五十三次

南無諸佛分身　骰子の目に今は●から●●●までをしるすが此の頃はこの六字を書いた

打出の濱　近江國大津の湖岸

矢橋　大津から矢橋へ舟で湖水を渡す瀨田長橋をとほると遠まはり姥が餅

ストよりも、ハムレットよりも有難く考へられる。かうやつて只一人、繪具箱と三脚几を擔いで、春の山路をのそ〳〵歩くのも全くこれが爲である。淵明・王維の詩境を、直接に自然から吸收して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願、一つの醉興だ。（漱石全集――草枕）

三　馬追三吉

近松門左衛門

これ〳〵御覽ぜ、打たしやんせ。これこそ五十三次を居ながら歩むひざ、膝栗毛馬。はいしいだうちう雙六。南無諸佛分身と書いた六字を六角の骰子は櫻木、花の都をまんなかに思ひ〳〵のしるしを置いて、さらばこちから打出の濱。大津へ三里。こで矢橋の舟賃が、出舟めせ〳〵、旅人の乘りおくれじとどさく

近江國草津の宿の名物　みなくち鰌　近江國水口宿の名物坂　立神坂　近江國土山より伊勢國坂下へ鈴鹿山脈をこす坂　三重縣伊勢國鈴鹿郡關町　鈴鹿關のあつた處　龜山　同郡龜山町　石藥師　同郡石藥師村　吉田　今の豐橋市　二川　愛知縣三河國渥美郡大川町二川　豐橋の東南八粁　白須賀　靜岡縣遠江國濱名郡白須賀町　新居　同郡新居町　もと關所があつた

さ津。御姫樣よりまづ姥が餅。一口・二口・みなくち鰌踊りこえ、坂へ越すのも骰子次第。骰子をふれ〳〵、ふるや鈴鹿を跡にさがれば負けまいとせきに關より龜山に、煙草火うちの石藥師。おつと桑名の舟わたし。吉田・二川・白須賀ちよいと越えて、新居・今切、舟に召せ〳〵、蛤召せのはまぐり〳〵濱松まで舞坂三里な。のり掛川を飛びおりて、機嫌笑顏や、さあ日坂の蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川。仕合よしの旅雙六里、七里八里もたゞ一足に、さきへ〳〵と咲きかゝりたる藤枝・岡部・瀨戸の染飯、うつの山邊の十團子、ところ〴〵の名物買うて、お錢つく〳〵つく手鞠子にひいふうみいよ、府中・江尻にすつとん〳〵。とんと打つたる興津波、松原はるゝ、膏藥買うて、月をすひ出せ淸見寺。由井・蒲原や吉原のはなの蒲燒、名物の鰻の膚沼津の宿。三島越ゆれば箱根

舞坂　新居舞坂の間四粁　そこに今切がある　明應七年(三五八)の地震に切れて湖水が海に通じた　舞坂濱松間十二粁
日坂　靜岡縣遠江國小笠郡日坂村
掛川の東八粁　佐夜中山の西の坂
藤枝　同縣駿河國志太郡藤枝町
岡部　同郡岡部町
藤枝の北八粁
瀨戸　藤枝と岡部の間の宿　こゝの名物くちなし染の乾飯を瀨戸の染飯といふ
うつの山邊　靜岡縣駿河國安倍郡宇都山　十團子はこゝの名物
興津由井蒲原　何れも同國庵原郡

へ三里。骰子目次第に關越ゆる、惡い目打てば手判を取りに元の京へ立歸る。合點か。おゝ呑込んだ小田原外郎・大磯・平塚・藤澤のさはりもなしに雙六のさいさきもよし、門出よし、道中早めてとつかはと急ぐ程が谷・神奈川越え、川崎を越え、品川越え、まづ先駈のお姫樣、一番勝に勝色の花のお江戸に着き給ふ。一の裏は雙六のさいはひあり、喜あり、慰みありける道中とどつと興にぞ入り給ふ。

お側の衆に囃されて、幼心の姫君「かう面白い吾妻とは今までおれは知らなんだ。さあ〳〵往かう、早往かう。」「やあござらうとおつしやるか。そりや、めでたいは〳〵。又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。」と立騷ぐ。お乳の人は勇みをなし、「左樣なら、ま一度大殿樣・お袋樣とお盃。これも馬子殿お蔭ぢや、出來いた〳〵。

吉原　同國富士郡吉原町
外郎　小田原の名物痰の藥　元の禮部員外郎陳宗敬の傳へた藥
とつか　神奈川縣相模國鎌倉郡戸塚町
程ヶ谷　今横濱市保土ヶ谷區
けなもの　殊勝な者

そちには禮いふ、褒美やる、其處に待ちやや。」とさゞめき渡り、奥に御供し入りにけり。

馬方は遂に見ぬ金の間を、うそ〳〵と覗き廻れど、筵のほか踏みもならはぬ備後表。「えゝ此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりもこつちのうちがけつこでござる。」と獨り言して居たりけり。

お乳の人は大高にお菓子樣々ぶんかうに盛入れ、「どれ〳〵三吉其處にか。まあ〳〵そちはけな者ぢや。道中雙六お目にかけ、それ故に姫君樣お江戸へござろと御意なさるゝ。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、有難う戴きや。お錢三筋、買ひたい物買やや。ことにそちは通し」ぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢ

やに、馬方させる親の身は、よく〳〵であらう。」と、いと懇の詞の末、三吉つく〴〵聞きすまし、「由留木殿の御内、お乳の人滋野井樣とはお前か。そんならおれが母樣。」と抱きつけば、「あゝこは慮外な。おのれが母樣とは。馬子の子は持たぬ。」と、もぎはなせば武者ぶりつき、引きのくれば縋りつき、「何の、無い事申しませう。わしが親はお前の昔の連合、此の御家中にて番頭伊達の與作。其の子は私。此方樣の腹から出た與之介はわしぢやはいの。父樣は殿樣のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覺え。沓掛の姥が咄には、『母樣も離別とやらで殿樣に御奉公、こなたを姥が養育し、父樣に逢はせたう思へども甲斐もない。母樣の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋野井樣と尋ねよ。』と懇に敎へて、姥はおれが五つの年、ひさしう痰を煩うて、擧句に鳥羽

沓掛
京都府山城國乙訓郡大枝村沓掛
京都より丹波に通ずる老坂卽ち大江山の東の宿
馬子の縁でこの地を出した

の祭にいて、餅が喉につまつてつい死んでのけました。在所の衆が養ひで、やう〳〵馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。これ守袋を見さしやんせ。何のうそを申しませう。お前の子に紛れはない。外に望は何もない。父樣を尋ね出し、一日たりとも三人一所に居て下され。みごと沓も打ちまする。此の草鞋もわしが作つた。晝は馬を追うて、夜は沓打ち草鞋作り、父樣・母樣養ひませう。父樣と一つに居て下され。拜みまする母樣。」と取附き、抱附き、泣き居たり。

お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我が子の與之介、守袋も覺えあり、飛附いて懷に抱き入れたく氣はせけども、「あつあ大事の御奉公、養ひ君のお名の疵、僞つて叱らうか。いや、かはいげに、さうも成るまい。まあちよつと抱きたい。あゝ、どうせう。」と、百千

石部
滋賀縣近江國甲賀郡石部町

色の憂き涙雙つの眼にはたもちかね、咽び沈んで居たりしが、いやいや我が子ながらもさかしい者、僞つて眞とせず、母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと涙のごうて氣をしづめ、「こゝへ來い、與之介。」と引寄せて兩手を取り、「さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしう、なぜ尋常にも育たぬぞ。顏の道具、手足まで、母はかうは生みつけぬ。美しい黑髮を、このやうに剃りさげて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞ。」とさめ〴〵と泣きけるが、「これ、ものを合點しや。腹から生んだは生んだれども、今では子でも母でもない。あさましう成りさがつたを嫌うて言ふでは更々ない。こゝの譯をよう聞きやや。母はもと御前樣の奉公人、與作殿は奧小姓。殿樣の御慈悲にて夫婦にな

され、與作殿は段々に奏者役、番頭、千三百石までお取立、追腹ほどの御恩の家。其の間にそなたを設け、上には姫樣御誕生。御內證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に、二番と下座に下らぬ人。情なや父樣が江戸詰に大事の所を仕損ひ、又切腹に極つた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ。時には、大事のお姫樣の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其の儘殘さう爲、父樣の命助り、奉公構ひの御改易。其の時母も一緒にのけば、尤も夫婦の道は立つ。『お姫樣の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。殘つて御恩を報じてくれ。』と父樣のことわりゆゑ、第一は男のため夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼うても、御勘氣の末、氣遣ひな。

興作が子とばし言やんなや。さあ早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生れ性、現在我が子に馬追させ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乘つたとて、これが何になる事。」と聲を忍びに泣くばかり。

近松門左衛門

子は生れつき賢くて聞分けあるほど猶泣入り「悲しい話を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。」といへば、ちやつと口おさへ「あゝあゝ勿體ない。其の乳兄弟言はぬこと。姫君様は關東へ養子嫁子にお下り。高

蟻の穴
千丈ノ堤螻蟻ノ穴ヲ以テ潰ユ
（韓非子）

まつべて
まとめての俗語か

いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體。三吉と云ふ馬追が乳兄弟にあるなどと、どう妨げにならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。輕い樣で重い事。ひそ〳〵言うて人も聞く。まづ早う出てくれ。」と泣く〳〵云へば、「あゝ、母樣あんまり遠慮過ぎました。先づ言うて見て下され。」「まだ言ひ居るか、聞分けない。夫の事、我が子の事、母に如才があるものか。合點の惡い、聞分けない。」と制するうちに奥よりも、「お乳の人はどこにぞ。御前から召します。」と呼ばはれば「あれ聞きや。人が來る。出てたも。」と手を取つて引きいだす。

不便や三吉しく〳〵涙、頰冠して目を隱し、沓見まつべて腰に附け、見すぼらしげな後影、「こりや、ま一度こちらむきや。山川で怪我しやんな。雨風・雪ふり・夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日

も三日も休んで、煩はぬ様にしてたも。毒な物食はずに、腹や痲疹の用心しや。可愛のなりや、いた〳〵しや。千三百石の代取が何の罰ぞ、咎めぞ。」と、式臺の段箱に身を投伏して歎きしが、懷中の有合ひ一歩十三、袱紗に包み、「これ、たしなみに持つて居や。」と涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。其の一歩もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の輿作が總領ぢや。母様でもない他人に金貰はう筈がない。えゝ胴慾な母様、覺えて居さつしやれ。」と、わつと泣出す其の有様。母は魂消え入りて、「養ひ君、お家の御恩思はずば、さて一人子を手放して、なんのやらうぞ。奉公の身のあさましや。」と、悶え焦れて歎きける。

時に奥口ざゝめいて、「早御立ち」と姫君の御輿舁きあげ行列立て、お乳の人の乘物を平附けにこそ舁きよせけれ。お乳はさあらぬ顏附して、「姫君の御伽に最前の馬方を此の乘物に引附け、お慰みに謠はしや。」「畏まつた。」と宰領ども「こりや、其處な自然生め、謠ひ居らう。」とぎごつなく、「やあ此奴はほえをるか。何ぢやこりや忌々し。」と握拳を二つ三つ戴きながら泣聲に、「坂は照る〳〵、鈴鹿は曇る、土山あひの、あひの土山雨がふる。」ふる雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ雨やどり。（近松傑作全集——丹波與作）

坂は　小室節又は小諸節といふ小唄

井原西鶴　元祿時代の小說作者　大阪に住む　浮世草子作者として江戸時代文壇の重鎭　その作二十餘種　元祿六年（一三三）歿年五十二

室町　京都市烏丸通の西の通

烏丸通　今の京都驛の前を北に通ずる通

四　世界の借家大將

井原西鶴

室町菱屋長左衞門殿借家に居申され候藤市と申す人確に千貫目御座候。廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし。子細は二間口の棚借にて千貫目持、都の沙汰になりしに、烏丸通

に三十八貫目の家質を取りしが、利銀積りておのづから流れ、始めて家持となり、是を悔みぬ。今までは借家に居ての分限といはれしに向後家あるからは京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。

井原西鶴

此の藤市利發にして、一代の内にかく手前富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過ぐる本なり。此の男家業の外に、反故の帳をくり置きて見世を離れず。一日筆を握り、兩替の手代通れば、錢・小判の相場を附置き、米問屋の賣買を聞合はせ、生藥屋・呉服屋の若い者に長崎の樣子を尋ね、繰綿・鹽・酒は江戸棚の狀日を見合はせ、毎日萬事を記し置けば紛れし事は爰に尋ね、洛中の重寶になりける。

海松茶
海松の如く黒みがかつた茶色

鳥部山
京都の東山にある共同墓地

當藥
せんぶり
苦參

不斷の身持、肌に單襦袢、大布子綿三百目入れてひとつより外に着ることなし。袖覆輪といふこと、此の人取りはじめて、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、終に大道を走りありきし事なし。一生の内に絹物とては紬の花色、一つは海松茶染にせしこと、若い時の無分別と、二十年もこれを悔しく思ひぬ。紋所を定めず、土用干にも疊の上に直には置かず。麻袴に鬼縅の肩衣、幾年か折目正しく取置かれける。町並に出づる葬禮には、是非なく鳥部山に送りて、人より後に歸りざまに、六波羅の野道にて丁稚もろとも當藥を引いて、是を陰干にして、腹藥なるぞと、只は通らず、躓く處で燧石を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帶持はよろづ斯樣に氣を附け

ずしては有るべからず。此の男、生れついて吝きにあらず。萬事の取廻し人の鏡にもなりぬべき願、かほどの身代まで年とる宿に餅搗かず。忙しき時の人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、是も利勘にて、大佛の前へ誂へ、一貫目に付何程と極めける。十二月二十八日の曙、急ぎ荷なひつれ、藤屋見世に並べ、「請取り給へ。」といふ。餅は搗きたてのこのもしく春めきて見えける。旦那はきかぬ顔して、十露盤置きしに、餅屋は時分柄にひまを惜しみ、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、扛秤の目りんと請取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて、「今の餅請取つたか。」といへば、「はや渡して歸りぬ。」「此の家に奉公する程にもなき者ぞ。溫もりのさめぬを請取りし事よ。」と、又目を懸けしに、思の外に減のたつこと、手代我を折つて、食ひも

大佛
京都方廣寺の大佛

せぬ餅に口をあきける。

其の年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を目籠に入れて賣り來るを、七十五日の齡、これ樂しみの一つは二文、二つは三文に値段を定め、何れか二つ取らぬ仁はなし。藤市は一つを二文に買ひていへるは、「今一文で、盛なる時は大きなるが有り。」と、心を附くる程のことあしからず。

井原西鶴筆

東寺
もとの京都の南端九條にある眞言宗の本山

筆蹟
時雨
しく〳〵し若子のね覺の時雨かな　西鶴

屋敷の空地に柳・柊・楪葉・桃の木・花菖蒲・薏苡仁など取交ぜて植置きしは、一人ある娘が爲ぞかし。葭垣に自然と朝顔のはひかゝりしを、同じ眺めにはかなき物とて刀豆に植ゑかへける。何より我が子を見る程面白きはなし。娘大人しくなりて、やが

て嫁入屏風を拵へとらせけるに、「洛中盡を見たらば、見ぬ處を歩きたがるべし。源氏・伊勢物語は心のいたづらになりぬべきものなり。」と、多田の銀山出盛りし有樣書かせける。此の心からはいろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を敎へ、ゑひもせず、京のかしこ娘となしぬ。

親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず。節供の雛遊をやめ、盆に踊らず。毎月髮かしらも自ら梳きて丸髷に結ひて身の取廻し人手にかゝらず。引きならひの眞綿も着丈の縱横をでかしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。

折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市方へ長者になるやうの指南を賴むとて遣はしける。座敷に燈かゞやかせ、娘を附けおき、露地の戸の鳴る時しらせと申し置きしに、此の娘しをらしく

多田の銀山
今の兵庫縣攝津國河邊郡多田村にある古い鑛山
伊丹町の北十二粁

かしこまり、燈心を一筋にして物申の聲する時、元のごとくにして勝手に入りける。三人の客座敷に着く時、臺所に擂鉢の音響き渡れば、客耳を悅ばせ、これを推して「皮鯨の吸物」といへば、「いやいや始めてなれば雜煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて、「煮麵」と落着きける。必ずいふ事にして、をかし。

藤市出でて三人に世渡の大事を物語して聞かせける。一人申せしは「今日の七草といふいはれはいかなる事ぞ。」と尋ねける。「あれは神代の始末はじめ、增水といふことを知らせ給ふ。」又一人「掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは。」と尋ぬ。「あれは朝夕に肴を食はずに、これを見て食うた心せよと云ふ事なり。」又太箸をとる由來を問ひける。「あれは穢れし時、白げて一膳にて一年中ある樣に、これも神代の二柱を表すなり。よく〳〵萬事に

掛鯛
藁繩で結び合はせて竈の上などに掛ける二匹の干鯛
荒神
竈の神

氣を附け給へ。さて、宵から今まで各〻話し給へば、最早夜食の出づべき處なり。出さぬが長者になる心なり。最前の擂鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を擂らした。」といはれし。（日本永代藏）

五　草雙紙

市島春城
名は謙吉
早稲田大學名譽理事
萬延元年（一八六〇）越後國生

日本の小說は極めて古い時代から相當に發達して居たものであるが、しかし古代に於ては殆ど貴族の間にのみ讀まれたので、民衆的に小說の讀まれるやうになつたのは、ずつと下つて江戸時代に入つてからのことである。卽ち版木といふものが盛に行はれて、文章や挿繪を木版に彫つて廣く一般に流布するやうになつてからのことである。其の以前は文章も繪も書いたものであるから、なか〳〵一般に及ぶ譯が無く、先づ貴族階級に限つて讀まれたに過ぎない。隨つて其の小說が如何に傑作でも、低い階級に對しては殆ど何等の文化的影響をも與へなかつた。それが木版の利用に依り廣く一般民衆に及んで、女子供も小說を讀むやうになつたのは、日本文化史上に特筆すべきことと謂つてよい。

柳亭種彥

こゝに言はうとする草雙紙は前に申した民衆的小說の最も熟しきつた時代の產物である。今日は草雙紙などといふものは殆ど高閣に束ねて見る人も無い。少しも漢字を交へず、假名ばかりで、句讀も切らず、虱のやうな小さな字を紙の全面に書き列ねたものを今讀むのは、頗る面倒なことである。隨つて若い人たちの中には

柳亭種彥
江戸後期の戯作者
その代表作は
田舍源氏
正本製
邯鄲諸國物語
天保十三年(一五〇二)歿
年六十

田舍源氏
偽紫田舍源氏
三十八篇百五十二册
文政十二年より天保十三年まで前後十四年を費して出版した

曲亭馬琴
瀧澤氏
江戸後期の一大戯作者
著作は三百數十部千三四百册に及ぶ
その代表作は
里見八犬傳
弓張月
南柯夢
美少年錄
嘉永元年(一五〇八)歿
年八十二

殆ど草雙紙を知らぬ者もあらう。が、江戸時代に於ては、此の草雙紙が種々なる著述家の手に依つて作られ、江戸は勿論、廣く全國に行はれて、民衆的文藝として驚くべき勢を有して居たのである。

草雙紙の最も隆盛なりし時期を代表し、且作者として最も有名であつたのは柳亭種彥である。種彥の草雙紙には田舍源氏を始め種々のものがあるが、これらの著作は正に一世を風靡するの概があつた。當時曲亭馬琴は八犬傳其の他の大作に名聲を馳せたが、どうも一般の評判は馬琴に無くて寧ろ種彥にあつた。それで馬琴の本を出版し又は販賣する書肆が時々馬琴に向つて、「先生もえらいが、世間では種彥先生のものをなか〳〵持囃して居る。」畢竟種彥先生の作は書き方が通俗的で、分りがよいからであらう。」といつた。獨り書肆のみで無く、馬琴の友人で、其の作の出る毎に批評したと云はれて居る殿村篠齋の如きも、頻に種彥に感心して、「あなたもあれを餘り度外に置いてはいかぬ。」と注意した位である。そこで傲岸の馬琴は「なにおれだつてあれ位のことは出來る。」と、負けぬ氣になつて書いたのが、例の美少年錄である。しかし馬琴の持前の學問を衒ふ風はこゝにも附纏うて、小說家の本領を離れ、ともすると長々しい考證を擔ぎ出すのでやはり一般の受けは種彥にあつた。

そこで草雙紙に就いて少し考へて見ると、これが其の當時に於てよくも工夫されたものだといふ事を今更ながら感ずる。文體は必ずしも言文一致では無いが、殆どそれに近いもので、全然漢字を用ひず、假名のみで、極めて幼稚のものにも理解の出來る

美少年錄
近世說美少年錄
繪入讀本
二十五册
未完結

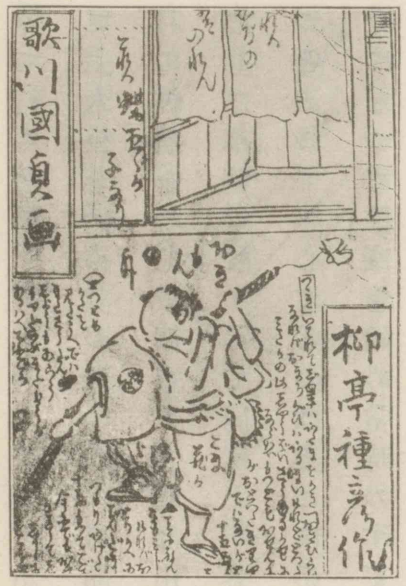
やうに書いてある點は、よほど民衆的の味を持つて居る。又草雙紙の今一つの特長は、半ばは繪を以て目に訴へるといふ趣向で、各頁に亙つて繪が挿まれ、それを見れば大凡その意味が了解されるやうに工夫されてゐる。順々に紙を繰つて見ると、次の頁は前の頁と畫面が直に接續するやうに出來て居り、何百枚はぐつて見ても、其の經路が一目瞭然と分るやうに筋を追うて描かれてある。斯樣に何十册、何百册の長篇でも初から終までそれを飜して行けば、文章を讀まずとも略、其の大意が分る位に細密な繪が掲げてある有樣はちやうど今日の活動寫眞を見るやうな味はひがある。況んや其の本文の妙味に至つては、とても今の活動辯士の說明などの類では無い。固より作者にもよるが、種彥の如き、相當の學問もありながら、敢へてそれを振廻はさず極めて通俗的で、しかも流麗な文字を驅り、具さに世態人情の機微を穿つた點は、全く今日讀んで見ても三嘆の外はない。あの位柔かみのある宛轉自在の文章は、古今の文學に於ても稀に見る所であると思ふ。

草雙紙の挿繪に就いてはなほ少しくいふ必要がある。當時の小說は繪に重きを置いた。勿論作者の見識からいへば、繪はお伴に過ぎぬと考へたのであらうが、一般の讀者は先づ第一に繪を味はつたものである。少くとも繪が作者の言葉を非常に助け、或意味に於ては文章以上の働をしたのである。當時は小說のみならず、一般に繪を入れることが大流行で狂歌の本でも、俳諧の本でも、立派な大家の繪が挿まれてあるものが少くない。勿論狂歌の本ならば狂歌が本位で、繪はたゞ景物といふつもり

北齋
葛飾氏
江戸後期の畫家
嘉永二年（一八五九）歿
年九十

であつたのだらうが、今日では其の本を買ふ者は繪のために買ふので、肝腎の狂歌は寧ろ邪魔になる位に考へてゐる。それだから當時は北齋の如き、自分の伎倆を信ずることの深い畫家になると、なか〳〵作者に負けて居らず、一體君の本の賣れるのは文章のためでなく、俺の繪のためだなどと揚言して、屢、作者と喧嘩したこともある位で畫家の鼻息が頗る荒かつた。

實際、畫家の威張るのも道理で、此の挿繪については非常に骨の折れたものである。別けて草雙紙に於ては最も苦心を要し、一頁毎に連續した人物、或はその人物の行動を現してゆくといふことは、なか〳〵容易の事でなかつた。それが動もすると何百頁、何千頁と追うてゆくのであるから、凡庸の畫家ではとてもやりきれない仕事である。種彦の如きは、田舍源氏の出版に當り、悉く自己の圖案を授けて、それに從つて描かしめた。田舍源氏はいふまでも無く源氏物語にかたどつたのであるが、しかし時代をずつと下げて室町時代としたものであるから、すべて衣服でも調度でも、皆それ相應のものでなければならぬ。隨つて普通の浮世繪師にはなか〳〵書けないので、種彦は非常に苦心をかさね、一々畫家に圖案を授けたのである。全く田舍源氏が一般に受けたのは、第一に其の繪の極めて精妙であつたが爲に相違ない。此の長篇の小說について注意すべきは、卷中の人物が年を取るにつれて段々老いて



柳亭種彦の下繪

ゆくことである。嚴密にいへば十頁も隔たれば、其の顏に多少ふけた所が無くてはならない。更に何百頁も隔たればよほど年の寄つた面影が無くてはならぬのだが、挿まれた繪を順々に見て行くと、ちやんと此の理窟にかなつて居て、卷の進むに隨つて主人公を始め其の他の人々の顏容に變化を來し、明らかに年月の經過を現して居る。これは田舍源氏のみならず、挿繪に苦心した草雙紙はすべて同樣だ。外人が日本の草雙紙を見てあつと云つて感心するのはそこにある。

今になつて種彥を始め當時のすぐれた作者のやり口を考へてみると、其の頃としてきはめて新しい行き方をしたものと謂へる。それは或意味に於て今日西洋の作家のやつて居る所或はそれに倣つて日本の作家がやつて居る所と甚だ近いのである。

パノラマ Panorama

馬琴流の堅苦しい文字などは用ひずに、さら〳〵と假名のみで綴つてゆく點、內容が通俗的である點、又目に訴へる爲に連續的の繪を重ねて全くパノラマ式に事件の展開して行く點などは如何にも新しい試で、特に其の繪を何百枚、何千枚と限りも無く重ねて行くやうなのは西洋にもあまり類の無いことである。

今日の活動寫眞はこれに似た趣もあるが、それが早くも此の時代に試みられたのみならず、畫中の人物が悉く活動して、卷の進むに從ひ年齡も幾つ位とびつたり當てはまる程度に描寫して居るなどは、寧ろ今日以上と言つてよいであらう。

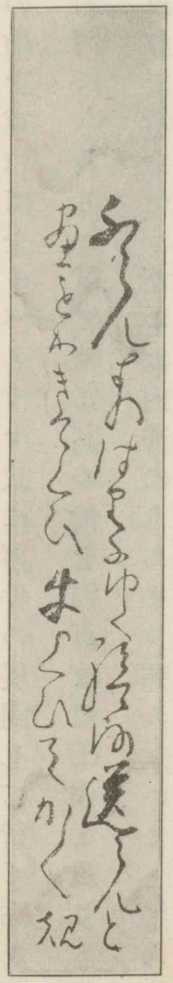
要するに此等の草雙紙は其の內容に於て、今日の小說に比し、決して遜色の無いばかりで無く、其の挿入の繪畫に於て、殆ど古今東西に例の無い趣向が凝らされてある。さういふ草雙紙が當

時非常な歡迎を受け、種彦等の作が一世を風靡したのは決して偶然ではあるまい。（春城隨筆）

六　山吹の花

正岡子規

水汲みにゆききの袖のうちふれて散りはじめたる山吹の花



正岡子規筆

くれなゐの梅散るなへにふるさとにつくし摘みにし春し思ほゆ

正岡子規
俳人
歌人
名は常規
伊豫國松山生
明治三十五年歿
年三十六

筆蹟
ふらんすのばりにゆく繪師送らんと畫をかきて食ひ牛くひてかく　規

伊藤左千夫
歌人
名は幸次郎
上總國生
大正二年歿
年五十

島木赤彦
歌人
教育者
本名久保田俊彦
長野縣上諏訪町生
大正十五年歿
年五十一

齋藤茂吉
醫家
歌人
醫學博士
明治十五年山形縣生

天地の四方のよりあひを垣にせる九十九里の濱に玉拾ひ居り

伊藤左千夫

高山も低山もなき地のはては見る目の前に天し垂れたり

島木赤彦

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

ある日わが庭の胡桃にさへづりし小雀きたらず冴えかへりつゝ

齋藤茂吉

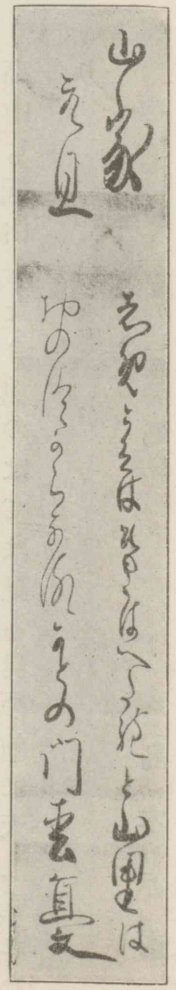
石原の涌きいでし湯に鯉飼へりちひさき鯉はこゝに育

たむ
いたゞきは雪かもみだる眞日くれてはざまの村に人は
ねむりぬ

落合直文

ひとつもて君を祝はんひとつもて親を祝はん二もとあ
る松

落合直文


落合直文筆

父君よ今日はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死な
れざりけり

與謝野寛

落合直文
國文學者
歌人
仙臺生
明治三十六年卒
年四十三

筆蹟
山家元旦
しめこそはひきはへ
たれど山里はおのづ
からなるかどの門松
直文

與謝野寛
歌人
詩人
明治六年京都生

石川啄木
歌人
新聞記者
名は一
岩手縣生
大正元年歿
年二十七

土岐善麿
歌人
新聞記者
號は哀果
明治十八年東京生

炭がまの青きけぶりの立ちなびき夕山さむしみづうみ
の上

石川啄木

わが道にしら雲多し高千穂にのぼるは天にのぼるなる
べし

石川啄木

ふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はあ
りがたきかな

石川啄木

たはむれに母を背負ひてそのあまり輕きに泣きて三歩
あゆまず

土岐善麿

わが言ふを聞きかへされしうるささにじつとだまれば
秋風の吹く

土岐善麿

北原白秋
歌人
詩人
名は隆吉
明治十八年福岡縣柳河生

あかつきの庭芝ふみてあるほどに子ら起きたらし戸を開きたり

紫蘭咲いていさゝか紅き石の隈目に見えて涼し夏さりにけり

北原白秋

アンテナ
Antenna

わが家の高きアンテナ良夜は光まさりぬ濡れにけらしも

窪田空穗
歌人
名は通治
明治十年長野縣生

わが家をめぐりては降る春雨のかそけき音を聞けば耳に満つ

老い八つ手群れて暗しと我が見しにひそかにつけぬ青白き花

窪田空穗

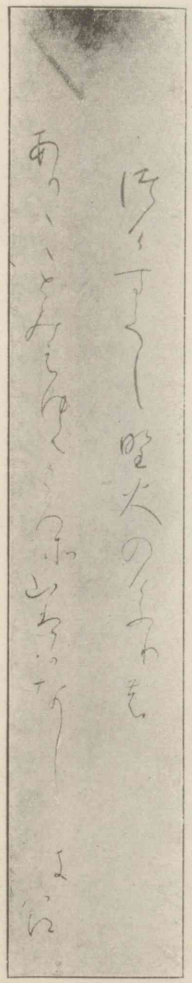
金子薫園
歌人
名は雄太郎
明治十一年東京生

合歡の花山の湖畔の夕ぐれにひと木ほのかに立ちてあるかな

兒が額に手をあててみて熱なしと知りしねざめの心の静か

金子薫園

尾上柴舟
國文學者
歌人
書家
名は八郎
文學博士
東京女子高等師範學校教授
明治九年岡山縣津山生


尾上柴舟筆

つけすてし野火の煙のあかゝと見えゆくころぞ山はかなしき

木も草もわれとひとしき喜にひたるか朝の日にをどり

尾上柴舟

若山牧水
歌人
名は繁
宮崎縣生
昭和四年歿
年四十五

前田夕暮
歌人
名は洋造
明治十六年神奈川縣生

佐佐木信綱
國學者
歌人
文學博士
明治五年三重縣生

をり

つみ草のにほひ残れる指先を洗ひて居れば野に月の出づ　若山牧水

たち向ふ穂高が嶽に夕日さし涌きのぼる雲はいゆきかへらふ　前田夕暮

たゝなはる秩父むら山ふもとべの曠野にいでて人畑を打つ

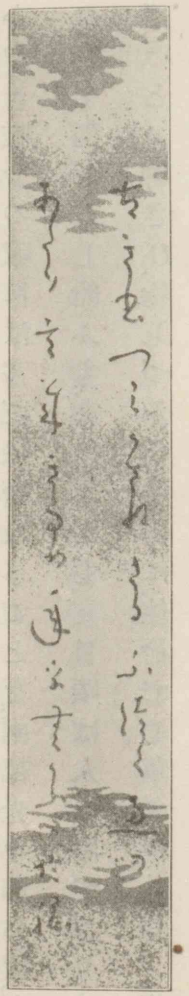
莖ふとき山獨活の花しろ〳〵と日をさゝげたり山は空晴る　佐佐木信綱

筆蹟
古きふみつみかさねたるふづくゑのあたりはきき〻め年をむかふる　信綱

木下利玄
歌人
子爵
大正十四年卒
年四十

人遠く行きてかへらず秋の日のひかりしみ入る石だたみ道

窓ちかき青桐の實のから〳〵とから〳〵と鳴る寒き夕暮


佐佐木信綱筆

さむ〳〵と暮れゆく道を猶あゆみ光りそめたる月を見るかな　木下利玄

夕ひゆる道となりけり苅草のにほひの中にわが家こひしも

石山
滋賀縣近江國滋賀郡石山村石山
岩間
同村南郷
國分山
同村國分にある山
國分寺
聖武天皇天平十三年（一四〇二）ごろ諸國に創建
光を和らげ
其ノ光ヲ和ゲ其ノ塵ニ同クス。（老子）
曲翠
芭蕉の門人
近江膳所生
五十年やゝ近き身
元祿三年（一六九〇）芭蕉四十七歳
象潟
秋田縣羽後國鳥海山の西北麓の名所
今は水が涸れて稻田になつてゐる
鳩の浮巣
かいつぶりが蘆の枯葉などで作つた水上の巣
やがて出でじ
吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ（西行）
吳楚東南に走り
昔聞ク洞庭ノ水。今上ル岳陽樓。吳楚東南ニ析ケ。乾坤日夜ニ浮ブ。……（唐の杜甫）
瀟湘・洞庭
惠宗ガ煙雨歸雁。我チ瀟湘洞庭ニ坐セシム。扁舟ヲ喚ビテ歸去ラント欲ス。故人道フ是丹青。（宋の黃山谷）
笠取
京都府宇治郡笠取村
笠取
石山の西南十二粁

七　幻住庵の記

松尾芭蕉

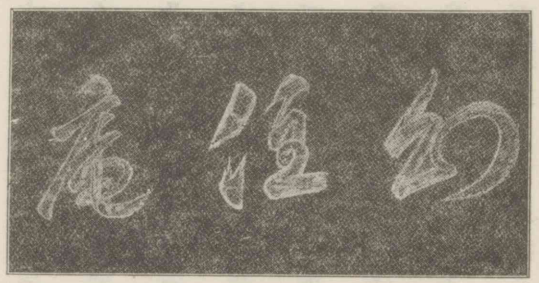
石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和らげ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物しづかなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ、屋根漏り、壁落ちて、狐・狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何がしは勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になん侍りしを今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予亦市中を去ること十年ばかりにして、五十年やゝ近き身は蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今年湖水の波に漂ふ鳩の浮巣の流れ留るべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月の初、いとかりそめに入りし山の「やがて出でじ。」とさへ思ひそみぬ。

さすがに春の名殘も遠からず、躑躅咲きのこり、山藤松にかゝりて、時鳥しば〳〵過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥のつゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘・洞庭に立つ。山未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して凉し。比叡の山・比良の高嶺より辛崎の松は霞こめて城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に

三上山
近江富士
石山の東北二十四粁
士峯
富士山
古人
猿丸太夫
墓は田上山の麓にあるといふ
海棠に
徐老海棠集ノ上。王翁主簿峯ノ庵。
（宋の黄山谷）

とく〳〵の雫
とく〳〵と落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなきすまひかな
（傳西行）

水雞のたゝく音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は士峯の俤に通ひて、武藏野の舊き住家も思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。なほ眺望隈なからんと、後の峯に這上り、松の棚つくり、藁の圓座を敷いて猿の腰掛と名づく。かの海棠に巣をいとなみ、主簿峯に庵を結べる王翁・徐佺が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となりて、孱顏に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。偶、心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく〳〵の雫を侘びて



一爐の備いと輕し。はた昔住みけん人の殊に心高く住みなして、巧みおける物ずき

高良山
福岡縣筑後國三井郡
高良山神宮寺
甲斐何がし
藤木甲斐守敦直
寛永時代の書家
慶安二年（一六四九）歿
年六十八

罔兩
罔兩景ニ問ヒテ曰ク、曩ニ子行キ、今子止ル。曩ニ子坐シ、今子起ツ。何ゾ其特操無キ歟。（莊子）

もなし。持佛一間を隔てて夜の物を納むべき處など聊かしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は賀茂の甲斐何某が愛子にて、此の度洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いと易々と筆を染めて幻住庵の三字を送らる。やかて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝は稀々とぶらふ人々に、心を動かし、或は宮守の翁、里の男ども入來りて、猪の稻食荒し、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、日已に山の端に懸れば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴なひ、燭を秉つては罔兩に是非をこらす。

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとにはあらず。やゝ病身、人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つ

樂天　唐の詩人白居易の號　會昌六年（皇紀一五〇六）歿　年七十五
老杜　唐の詩人杜甫　太曆五年（皇紀一四三〇）歿　年五十九
猿蓑集　芭蕉七部集の一　元祿四年（一三五）成

岩城準太郎　國文學者　奈良女子高等師範學校教授　明治十一年富山縣生

らつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬・祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、この一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の住家ならずやと思ひ捨ててふしぬ。

まづ賴む椎の木もあり夏木立　（芭蕉全集――猿蓑集）

八　生活の興味

岩城準太郎

生活の興味を感ずるといふことは、自然の興味を感ずるといふことと、略、同樣の心境に由るのである。自然と人生とを對立的に考へて、「自然は美し、されど人生は醜し。」といふやうな對句を用ひることは、昔からよくあることであるが、それは或主觀の色眼鏡をかけて見た一面觀察である。

自然にも美しいのと醜いのとあり、人生にも醜いのと美しいのとある。自然の中に美しさを發見するのが嬉しいなら、人生の中から美しさを發見するのも嬉しいことであらねばならぬ。もと〳〵自然と人生とは別物でない。人生は一つの自然であり、人間生活は卽ち自然の生活の一つである。對立すべきものではなくて、一方は他方の延長と見るべきものである。だから美しい、善いといふ方から考へれば、自然が美しいと同時に人生も美しく、自然に興味があると同樣に人生にも興味がある。厭世家は人生の醜い方面をのみ見て美しい方面を見ない。興味のある方面を捨てて厭惡すべき方面だけを取る。併しなが

ら此の紛々擾々たる世の中の事は、考へても胸がわるくなるやうないやなものだとも見られるが、又その裡に棄て難いうまみの存するものだとも認められる。醜い〳〵と言つてゐる事物の中に、案外にも美しい光の潜んでゐることを發見して驚くことが屢、あると同時に、厭惡に堪へないと思つてゐる生活の中に、意外にも放棄し難い感味を見出して、今更らしく目を睜ることが少くない。否、醜い世間、厭惡すべき生活そのものが、そのまゝで美しくもあり味はひ深くもあることを思ふことすらもある。醜い方面、厭離すべき方面でもかうであるから、まして美しい方面、興味ある方面は、厭世家でないかぎり、味はへば味はふほど、盡きぬ喜悅を感ずるものであることは言ふまでもない。それのみでない。平素美しと見、興味ありと見てゐる事物の中にも、從

來知つてゐる美しさや興味の外に、新しく別種の美點や趣味を認め得て、すつかり見直すほどの驚異を感じ、益、その美しさ、おもしろさを認めることさへもあるのである。

このやうな生活の見方は、銘々の對生活の態度から生れる。人間生活のいきぐるしさ、うるささ、腹立しさ、情無さの眞中にありながら、それらから起る苦悶に直面しながら、身にしみる哀愁に深く自己の境遇を反省しながら、それでも絶望もせず、自暴自棄にもならず、流蕩放逸にもならないで、落着いた心持を持續する態度から生れる。落着いた心持でそれらの生活を朗かに見取り、寛大に受入れ、美しく味はひ收める態度から生れる。此の態度は卽ち惡人の裡に善魂を認め、魔物に佛性を認め、流沙の中に金を拾ひ、土石の中に玉を拾ふものである。

凡そ自然や人生に對し、之を取扱ふ態度には、大略次の三通りの區別がある。一は功利的・實際的・道德的態度であり、一は研究的・知解的・思索的態度であり、一は卽ち、直觀的・鑑賞的・審美的態度である。以上の三者の中、第一の態度は實行の世界に存するもので、山水に對すれば企業の資料にしようと考へ、人事に對すれば修養の參考にしようと圖るやうな態度である。第二の態度は學術の世界に存するもので、事物に接する每に、或は解剖分析を試み、或は考察研究をなし、知解の力で以て眞理の門を開かうとする態度である。次に第三の態度は卽ち藝術の世界に存するもので、自然と人生とに對し、感應受用の力でその善美を體得しようとする態度である。

鑑賞的態度は理智の力で科學的に攻究する態度でなく、判斷の力で倫理的に取捨するのでもなく、全く感情の力で綜合的に受入れるのであるから、此の態度で生活に對すると、あらゆるものが玩味愛賞せられて、頗る餘裕のある氣分になれるのである。窮屈な、齷齪した、こだはつた、いら〳〵したやうな心持から解放せられて、專ら伸び〳〵とした、和らいだ、樂易な、寬大な心持になることが出來る。

かうして生活の興味を感じ、人生の趣味に徹するといふことは、人間としての幸福の一つで、而もその中の最も大なるものの一つである。此の境に入ると、狹かつた世間が廣くなり、憎かつた人間が愛したくなり、厭はしかつた社會が懷かしくなつて、生れかはつたやうな、性質上又は人格上の變動を覺えるのである。此の心持が一日續けば一日だけ幸福であり、一月續けば一月だ

け幸福であり、生涯續けば生涯幸福であつて誠に生甲斐のある日月を送ることが出來るのである。

右の事柄は專ら實生活の上に存するのであるが、これが文學に表現せられ、藝術に描寫せられると、一層明瞭になり、一層具象的になつて、永く後世に傳はることが出來るやうになるのである。

芭蕉翁の文學の對人生の態度は、正しくこれであつて、通例の世間で興ありと見てゐる生活を描寫するは言ふまでもなく、何等顧みられ愛せられることのない生活をも、同樣に愛撫し、顧憐するのである。そして之が文學となつて現れた場合には、その生活が一層の光彩を帶び、一層の貴さを感ぜしめるのである。

猿蓑集の連歌に、

布子着習ふ風の夕ぐれ　凡兆

押しあうて寢ては又たつ假枕　芭蕉

といふのがあるが、こんなわびしい生活にも興趣を感じて、悠揚とした態度で之を味はひ樂しむことが出來れば、どんな困難と苦悶との中に立つても、決して愚痴をいつたり、呪つたり、憤つたりすることが無いであらう。又同じ集にこんなのがある。

猿曳の猿と世を經る秋の月　芭蕉

年に一斗の地子はかるなり　去來

こそ〳〵と草鞋を作る月夜ざし　凡兆

蚤をふるひに起きし初秋　芭蕉

手のひらに虱這はする花の蔭　芭蕉

霞動かぬ晝のねぶたさ　　去來

此の樣な生活に感興をもつて、之を詩歌に表現しようと試みたものは、蕉風の文學が始であり、表現して立派な藝術に仕上げたのも蕉風の文學が始である。素樸の生活、貧賤の生活が美しい光彩を放ち、貴むべき感味をもつて來るのは、卽ち生活を見る眼が向上して來たからで、蕉風以前の詩歌では、到底題材になり得ないものとせられてゐた是等の生活を、しみ〴〵と味はひつくづくと眺めて、これに盡きぬ興味を感じ、にじみ出る光彩を認めるやうになつたのは、卽ち近世詩人の生活感の展開である。俗事とか雜事とか云つて、通例うるさいものとして、風流韻事と緣のないものに取扱はれてゐる生活現象に於ても、亦この事が見られる。米相場に血眼になつてゐる生活、金錢の取引や損得

に沒頭してゐる生活などは、とても詩歌になりさうもないものであるが、これも生活感の進んだ詩人には、通例風流・風雅と見られてゐる生活と同樣に、詩興が發見せられ、情趣が感ぜられるのである。

このやうな心境はどうして得られるか、生活のあらゆる現象に興味を認めるといふことはどうして出來るのか、これはやはり一つの修行による。相當の年月をかけて積んだ修養による。

かういふと、「いや、それは修行によらなくとも、始からその氣分になれる者がある。樂天觀を抱くものは、天性によるもあり、境遇によるもあり、必ずしも修行を俟つと限られない。」と難ずる人があるかも知れない。しかしながらさういふ側の人々の樂天觀は、極めて不安定なもので、いつ何時ぐらつくか分らない、甚だ危

險な狀態にある。修行を積まない樂天觀は、一朝人生の暗黑事に直面すると、忽ち顚覆するやうな、至極薄弱な基礎に立つものである。だからこれらは眼中に置かないとして、やはり修行を積んでどつしりと腹を据ゑ、伸び〳〵と餘裕をもつやうになつた心境から生れるのでなければ、本當のものでない。

芭蕉翁は此の心境に關して次のやうに語つてゐる。

俳諧の修行地には、淺きより深きに入り、深きより淺きに戻るべし。（語錄）

高く心を悟りて俗に返るべし。（同）

淺きより深きに入るは修行である。高く心を悟るも修行である。一旦深きに入つて然る後淺きに戻るので、金剛不壞の生活が開かれる。一旦高く悟りて然る後俗に返るので、圓融無碍の

心境が作られる。始から淺きに止り、元から俗に在つたのでは、煩惱・惑迷の境で、現象さながらの中に本然の美しい光を見ることは到底望むことが出來ない。まして金剛不壞の心境や、確固不動の觀想に入ることは思ひもよらぬことである。

あらゆる生活に感興をもつのは寬く大きな愛である、寬弘博大な慈悲の心である。上述の心境は、卽ち又此の愛と慈悲との境界であると云へる。此の愛や慈悲は、寬く大きいのであるから、平等であり公平であると同時に、頗る客觀的である。本當に事物の美しさを知り、快さを味はひ、人生を知るには、此の客觀的の態度でなければならぬ。そして此の心境に達することが卽ち修行である。此の修行を積めば、人事百般行くとして美ならざるなく、人間到る處靑山あり、隨所に主となつてこの生を樂しむ

ことが出來るのである。

萬象を客觀する修行は人間生活の醇美を發見するに、最も重要なものであるが、此の修行は實は甚だ容易でないので、他人の生活を客觀することは、比較的容易に出來ても、自己の生活を客觀することは、頗る困難な仕事である。偉人・傑士も之を難んじ、大人・君子も之を易しとはしない。人間に利害の念の有る限り、その念の最も强烈に働くのは、自己に關する場合である。人間に私といふ念慮の存する限り、無念無想の平靜なる心狀には容易に到り難い。

自分の生活を觀照し自分の生活を鑑賞することが出來る爲には可なり長い間の苦悶を經過しなければならぬ。世俗の塵累に直面して多大の試練を經なければならぬ。生活の惱を十二

分に經驗して死生の間を通過し來らねばならぬ。而もこれらの苦悶と懊惱と試練とを經て之に耐へ、慘澹たる惡戰苦鬪に打勝つて出る底力をもつてゐなければならぬ。この境地を經ない自己客觀は、砂上の樓閣よりも尙はかない一場の幻像である。』

生活鑑賞は安價なる享樂ではない。境遇に惠まれ、周圍に累せられず、おのづから我が生活を享樂し得る人々が、富めるは富めるまゝに、貧しきは貧しきまゝに己が生活を興じ己が生活を樂しむやうなのは論外である。これは修行でも何でもなく、唯與へられたる恩惠であり、因緣によつて起つた果報である。こゝにいふ自己の生活の客觀は天與の幸福に因るのでなく、前世の果報に緣るのではない。塵と泥とのどん底にあつて悲痛な努力を續けて來た者の、やつと浮み上つて有難い光明を捉へ得た

時に始めて到り得る境地である。（國文學の諸相）

九　苔清水

蓬萊の齒朶蹈みはづす鼠かな　正岡子規

苔清水馬の口籠をはづしけり

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

冬の日のあたらずなりし乾飯かな　内藤鳴雪

元日や一系の天子不二の山

矢車に朝風強き幟かな

初霜をいたゞきつれて黑木賣

内藤鳴雪
俳人
漢學者
名は素行
伊豫國松山生
大正十五年卒
年八十

明星や雪の入江のみをつくし　高濱虛子

もたれあひて倒れずにある雛かな

金龜子なげうつ闇の深さかな

桐一葉日當りながら落ちにけり

遠山に日の當りたる枯野かな　村上鬼城

春の雷一つ大きくなりにけり

ざぶ〳〵と素麺さます小桶かな

新凉や花びら裂けて南瓜咲く

土くれに二葉ながらの紅葉かな　水原秋櫻子

高濱虛子
俳人
名は清
明治七年愛媛縣松山生

村上鬼城
俳人
名は荘太郎
慶應元年（一八六五）上野國高崎生

水原秋櫻子
俳人
醫家
名は豐
醫學博士
明治二十五年東京生

天平のをとめぞ立てる雛かな
七夕やつねの浪漕ぐわたし守
蓮の中羽搏つものある良夜かな
伊豆の海初凪せるに火桶あり

横井也有

横井也有
俳人
俳文家
名古屋藩士
天明三年(一七八三)歿
年八十二

啼く音
もし鳴かば蝶々籠の苦を受けん（宗因）

荘周が夢
荘周が夢に胡蝶と化したこと
荘子にある

古今の序
花に鳴く鶯水にすむ蛙の聲をきけばいきとしいけるものいづれか歌をよまざりける

古池
古池や蛙とびこむ水の音（芭蕉）

翁
芭蕉翁

一〇　百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ荘周が夢も、このものには託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目をさましたれば、この物の事さらにも謗りがたし。

やがて死ぬ
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲（芭蕉）

貧の學者
車胤は貧しくて常に油を得ず夏月數十の螢を練嚢に入れてその明りで書を讀んだとのこと

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず。」とこのものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたゞふべきものなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく。五月の闇はたゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代にせられたるは、このものの本意にあらざるべし。

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならん。つくづくぼふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世

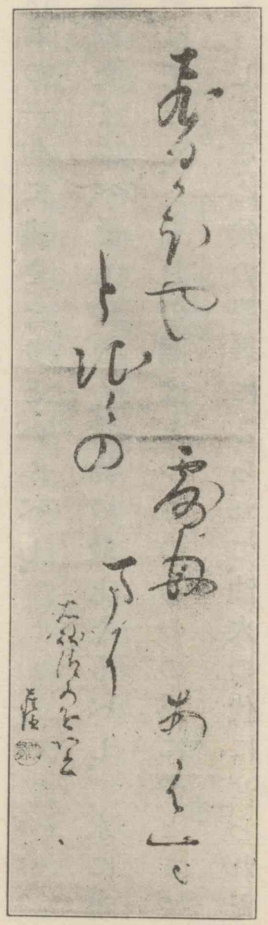
蜀魂
ほとゝぎすのこと
蜀の望帝の魂魄化してほとゝぎすになつたといふ傳説がある

筆蹟
ひるがほやどちらの露もまにあはず
右磯清水を以て書す　蘿隱

蓼くふ蟲
蓼喰ふ蟲もすきゝ

の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。』

蜘蛛は巧に網を結んで潜まつて物を害せんとす。ひとへに奸賊の心ありて、いとにくし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に蟬の羽など懸捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあらんか。



横井也有筆

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身をこがすや。蜉蝣（かげろふ）ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。

槐安の都
淳于棼が夢に大槐安國に入り王に見えて南柯郡の守となり二十年を經て送り出されたと見て夢がさめ古き槐の樹の下を尋ねると蟻の穴があつたといふ故事

蟷螂の
蟷螂が斧を擧げて龍車に當るといふ古語

原・吉原
駿河國駿東郡原町と吉原町

蟻は明暮にいそがしく世の營みに隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌をもとめてやまず。いつか槐安の都を遁れて、その身の安きことを得ん。さるも、たよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蝸牛は只水に在るべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

蛇・蚯蚓の足なくても歩くべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟷螂の痩せたるも斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩にたとふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠にのりて富士を眺めてゆく人には似たり。

つゞりさせ
秋風にほころびぬらし藤ばかまつゞりさせてふきりぎりす鳴く　（古今集）

藻に住む蟲
あまのかる藻にすむ蟲のわれからぬれをこそ泣かめ世をば恨みじ　（古今集）

蓑蟲
みの蟲いとあはれなり鬼の生みければ親に似てこれもおそろしき心ぞあらむとて親のあしききぬひきせて今秋風の吹かむ折にぞ來むずる待てよといひて逃げていにけるも知らず風の音聞きしりて八月ばかりになればちちよちよとはかなげに鳴くいみじう哀なり　（枕草子）

七賢
竹林七賞
晉の阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・王戎・阮咸

促織（はたおり）・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名によべり。松蟲のその木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名有りて、松を枯し人にうとまる。一つ在所に、二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりぎりすのつゞりさせとは、人のために夜寒を教へ、藻に住む蟲はわれからと、只身の上を歎くらんを、蓑蟲のちゝよと呼ぶは、母をば慕はずして、など父をのみ戀ふらん。

蚊は憎むべき限りながら、さすが、卯月の頃、端居めづらしき夕、始めてほのかに聞きたらん、又は、長月の頃、力なく殘りたるは寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家の樣、蚊遣焚く里の煙などかつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の

レオナルド
イタリヤの畫家でまた彫刻家建築家
フロレンスの畫家ヴェロッキオに學んで早く出藍の譽があつた
その傑作は「最後の晩餐」「モナリサ」「岩窟の聖母」など

Leonardo da Vinci
(1452—1519)

矢代幸雄
美術史家
東京美術學校教授
明治二十三年横濱市生

ナショナル、ガラリー
繪畫博物館
ロンドンのは一八二四年設立今の建物は一八三二年起工その後次第に增築

National Gallery

夜咄にはいかに團扇の隙なかりけん。（鶉衣）

一一　レオナルドに逢ふ日

矢代幸雄

此の大きな悅を如何にして傳へよう。あらゆる豫想を裏切つて美しい、そして偉いレオナルド、ダ、ヴィンチの繪の前に坐つて、私はいま泣きさうになつて居る。私は此の世に於てこんな幸福に逢はうとは思はなかつた。倫敦に着いて一週間になる。私は毎日ナショナル、ガラリーの此の「岩窟の聖母」の前に禮讚に來る。始めて海外へ來た美術史の研究者としての私は、倫敦に見なければならない澤山のもののあることを知つて居る。けれどもまだとてもそれを見る氣になれない。今、レオナルドが私の全部を支配して居る。私が永年これに逢ひたくて搜し索

め、何處に在るとも知らないで憧れきつて居た世界はこれだつた。毎日來て毎日新しい神祕が奥から奥へと展開する此の繪。無限だ。いつになつたならば此の繪が見きれると云ふのだ。あらゆる意味が其の中に在る。私の生涯のあらゆる悲哀も研究も體驗も、レオナルドを解し懷かしむ爲にあつたとしか思はれない。

眼をあげて繪を見る。高山の夜よりも靜かな靜けさが、海の底の青よりも深い青色を以て湛へられて居る。あの青は變な青だ。美しい青だ。恐しい青だ。吸ひこまれる青だ。怖いけれども見ずには居られない青だ。レオナルドの色だ。それよりもマリヤの顏を見よ。金光ともつかず、銀色の光ともつかず、とても此の世に在り得ない光に照らされて、マリヤ——

マリヤ　Maria　聖母

ヨハネ　Johannes

モナリサ　Mona Lisa　佛國ルーヴル博物館にあるレオナルドの描いた肖像畫　フロレンスの名家ジオコンド夫人をモデルにして一五〇四年まで四年かゝつてかいたがまだ未成品と自らいつたもの

私はこゝまで書いて再び眼をあげてマリヤを見たら、また胸が一杯になつた。何と書けばいゝと云ふのだ。此の稿を讀む人はこゝに涙ばかりこぼして居る私を笑ふだらう。

（レオナルドの筆）モナリサ

私は感傷主義を排する人間なのだ。併し今此の畫に對しては何ともたまらない。神の如き靜けさを以て自然と人の本質を凝視したレオナルドも、私の此の感傷をかしがるかも知れない。いや、そんな事はない。眼を繪にやれば、マリヤも、ヨハネも、幼き基督も、それにかしづく優しき天使も、皆慈雨の樣な憐みに溢れて居る。モナリサの微

笑を皮肉な笑とのみ評するのは當つて居ない。それも無論ある。併しそれの上にまた憐の愛の笑みが支配する。それがレオナルドの微笑だ。

雲の多い英吉利に日影が射すかと思へば翳る。翳つたかと思ふと、また忽ちに明るくなる。その度毎に此のレオナルドの繪が雲に從ふ海の色の呼吸する樣に面目を換へるのが變だ。今青い。青い。深淵の底に住むかと思ふ程に青い。ヨハネの跪く脚の下の水仙花が藻の花の樣に青い。今またすべてが暗い鳶色になつた。黄金の國の薄暮のやうだ。すべてが沈靜して、そして光に滿ちて居る。レオナルドが「黄昏は人の顏が美しく見える。」と云つた、それだ。

ミケランジェロ　イタリヤの彫刻家畫家建築家詩人　Michelangelo (1475—1564)

ラファエロ　イタリヤの畫家　Raphael (1482—1520)

チヽヤン　ヴェニスの畫家　Titian (1477—1576)

ヴェロッキオ　イタリヤの彫刻家畫家　Verrocchio (1435—1488)

ラスキン　英國の藝術批評家　Ruskin (1819—1900)

ナショナル、ガラリーによい繪が澤山ある。ミケランジェロもラファエロもチヽヤンもある。其等の中で、レオナルドだけが際立つて異なる世界を形作つて居るのはどう云ふ譯であらう。彼等の國を熱い地の國とするならば、レオナルドは正に凉しく透き徹る水中の世界だ。ひどい違ひ方だ。そこに藝術の要點があるのではなからうか。レオナルドを見てその世界に觸れないものは、レオナルドの友達ではないのだ。まして弟子でも何でもない。何の爲に繪を見るのだか解らない。無論私もレオナルドの描法がヴェロッキオに負ふところの多いことを知つて居る。或は自然描寫の立場に立つたラスキンが、此の繪の岩石の重疊を地質學的に誤謬だと主張したことも、構圖が復興期の金字塔型を嚴守してゐることも、或はルーヴルの同じ繪と

ルーヴル Louvre　巴里の中心にある王宮今は美術館

バイロン Byron (1788—1824)　英國の詩人

比べて、其の摸寫だらうと疑ふ人のあることも知らないではない。けれども美學的或は美術史的の細目に此の繪を割付けて知識的にをさまりをつけることが美術研究のすべてであつたならば、美術研究はあはれなものだ。道草だ。私はすべてを知らないで歸つてもよい。唯大きな魂に觸れて歸ればよい。レオナルドの弟子になつて歸りたい。

レオナルドの生きて居た同じ世界に自分が生きて居ると云ふことはうれしい自覺だ。私はバイロンと同じ樣に離れ行く船上から、私に暗かつた祖國に左樣ならをした。私は、船が西に駛るにつれて世界が急に明るくなつた。故鄕に遠くなる寂しい心よりも、過去を切りはなして自由を痛感する快さの方が切實だつた。「遠航の船の生活位愉快なものはない。」と、籠を出た小鳥

マドンナ Madonna　繪畫又は彫刻に表はされた聖母

最後の晩餐　レオナルド一代の傑作　ミラノに居た三十何歲の頃の作　基督が「汝等のうちに一人吾を賣る者あり」と告げられた時の弟子たちの驚き惑へる有樣が描いてある

サンタ、アンナ Santa Anna　レオナルド晩年の作

のやうに得意だつた。印度洋上行方も知らず飛ぶ雲を自分の身の樣に慕ひ出した。熱帶の星靑き夜に、乞はるゝまゝに希臘神話を長々と語る程に長閑な氣持にもなつた。あの美しき晩を如何にして忘れよう。私は航海中に藝術を身一杯に受容れられる氣持になつて居たのだ。そしてこゝへ來ると、レオナルドが待つて居た。もうこれで確だと思ふ。しかし何が確なのかわからない。あゝ樂しいことだ。また恐しいことだ。此の「岩窟のマドンナ」は、私の見た最初のレオナルドで、これは日本に居た時最も傑出した作と見做したレオナルドの作ではなかつた。モナリサに逢ひに行く時はどんなだらう。瑞西を越えて伊太利へ入つてミラノに「最後の晩餐」を訪ねて行く時はどんなだらう。サンタ、アンナはどんなだらう。アンナの素描(デッサン)はどん

なだらう。謙遜な、すなほな心を持つて、神聖なものであるかの如く近づいて行かう。私は調べに來たのではない。教を受けに來たのだ。巡禮者だ。（太陽を慕ふ者）

一二　藝術家

横山有策

横山有策
英文學者
早稻田大學教授
岡山縣生
昭和四年歿
年四十八

子供の部屋にはいつて見る。玩具が一杯に列べられ、家や庭や臺所や御馳走や、それからそれと列ね造られてある。子供等は走つて、今はどこに何を求めて居るか、そこには一人も居らぬ。只子供のなした仕事が殘つてゐて、限りなき愛らしさの匂ひが部屋の隅から隅に漲る。詩を讀むものは直に詩人を想ふ。一個の假面には、假面師の涙と微笑みがそこに讀まれて層一層の感興が涌く。

我々凡人とても、朧げながら外界の印象を受ける。受けて多くは忘却する。よし忘却せず、やがて之を何ものかに表現するにしても、その表現が拙劣若しくは微弱である。それを美しく成功して表現するには、藝術家といふ特殊な人物を俟たねばならぬ。

藝術家は直觀の、稀な複雜した情態をいみじく表現し得る人でなくてはならぬ。その直觀のうちには現在をつかむ強い明らかな力と、更に完全な世界を希求する理想のあこがれがなくてはならぬ。

藝術家は完成を期するの人でなくてはならぬ。短歌一つ詠じ、童話一つものするにも、全身を之に捧げて完成を期するのが藝術家の態度である。芭蕉翁が二十九歳、主家の藤堂家を出奔し、

老莊　周代の思想家　老聃と莊周
杜詩　唐の杜甫の詩

カーペンター　Carpenter (1844—1877)　英國の著述家

延寶九年（天和元年）　靈元天皇の御代（一三四一）　鬼貫二十一歳　芭蕉三十八歳

風流に身を委ねて東西に放浪し、禪を學び、老莊の學を修め、杜詩と親しみ、古歌に心を潛むること多年、世間からは新しい流派の棟梁とやゝ認められるに至つたが、自分では「いまだ一句も魂ありと思へる句を得ず。」と嘆息した尊い心が藝術家の心である。自分の仕事を輕んじてはならぬ。何とかなるだらうではいかぬ。經驗を尊重し、過失を反復せず、鋭く觀察し、深く思念せねばならぬ。カーペンターが、「自分の仕事に心から誇と興味とを感じ、その完全な仕上げをのみ念とし喜とする洗濯婆は、飯の種に、と展覽會に出品する畫家より遙かに立派な藝術家である。」といつたのは、又此の意に外ならぬ。

藝術家は至誠の人でなくてはならぬ。

「猶深き奥もやあらんと、延寶九年の頃より骨髄にとほりて、物

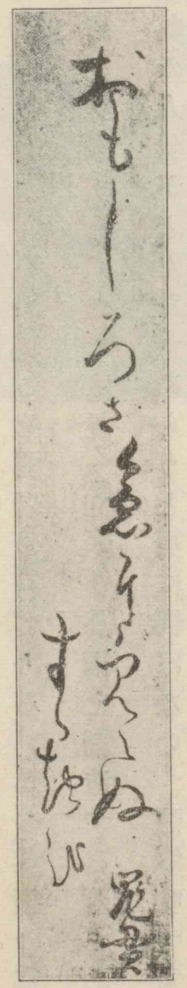
貞享二年　靈元天皇の御代（一三四五）　鬼貫二十四歳　芭蕉四十二歳

鬼貫　上島氏　俳人　攝津伊丹の人　元文四年（一三九九）歿　年七十八

筆蹟　おもしろさ急には見えぬすゝき哉　鬼貫

みな心にそむく事なく、やゝ五とせを經て、貞享二年の春、まことの外に俳諧なしと思ひまうけしより、その飾りたる色品も、かの一句のたくみも、ことゞく失せて、それはく皆そらごととなりぬ。」

と伊丹の鬼貫が自白したのは偉い。



上島鬼貫筆

自分に對し藝術に對して、誠ある人、赤裸々なる自己を表現し得る人でなくてはならぬ。名の爲に非ず、得の爲に非ず、將た他に立優らんとする競爭慾にも非ず、わが内なるものを十二分に發揮することを以て唯一の願とする人でなくてはならぬ。

カーライル
Thomas Carlyle
(1795—1881)
英國の思想家

「人を詩人にするのは其の人の至誠と洞察の深さとである。十分深く見よ、さすれば音樂的に見える。大自然の心情は、君がそれに達しさへし得れば、到るところ音樂なのだから。」（カーライル）

至誠は強者の印、不誠實こそ弱者の符である。かの「藝術の爲の藝術」を主張する人たちは說く、「立派な藝術を創造する人であれば、其の人物がどんなであらうと更に構はない。法螺吹でも、泥坊でも、人殺でもいゝ。」と。併し、かやうな奇言を弄する人々でも、藝術家は不誠實でもいゝとはいひ得ない。彼等が時に虛言家でもいゝといふのは、世間の凡庸を對手に、一々理路のあつた話ばかりしてゐなくてもいゝといふだけである。却つて彼等は、自己に忠實なれ、人間性に誠實なれといふことを高調して印象

深く述べてゐるのである。かの「天才」といふ言葉は、誠に定義しにくいのであるが、併し天才の要素の九分までは至誠であるとだけはいつて差支ない。

晩鐘（ミレイ筆）

そして藝術家は人生に對して言ふべき何ものかを持つてゐなければならぬ。人生と人生の問題とに沒頭し、潛心し、そして表現すべきあるものを得ねばならぬ。それは決して結論である必要はない。纏つた思想である必要もない。併し言ふべき何者もなくて、只修辭と技巧の末に誤魔化

ミレイ
Millet
(1814—1875)
佛國の畫家

し仕事をする者は藝術の敵である。フランス近代の名畫家ミレイはある門弟のス・ケッチを見ていふ。

「君は描ける。だが、言ふべき何かをもつてゐるか。」

と。まづ自ら深く感じ、切に悟り、強く興味を覺えて後、始めて他をして感じ、悟り、興味を覺えしめることができる。人生に對する驚歎と興味と、それが藝術の最初の要件である。

藝術は單に自然に向つて捧げられた磨ぎすました鏡だけではない。藝術家といふ人格の砂を濾過した清水である。人格の熔爐に陶冶された純金である。

藝術家と雖も社會の一員たる責任を免れるわけに行かない。又彼等の言行不一致は決して彼等の誇でもまた特權でもない。たゞ他の長所のために聊かの缺點を大目に見るだけである。

トルストイ
Tolstoi
(1828—1910)
ロシヤの思想家
小說家

ルナン
Renan
(1823—1892)
佛國の評論家
「キリストの生涯」を著して「神の子」たるを否定した

宗教は常に實行を要求する。實行なき宗教家はその生命を失つたものである。藝術家は觀、感じ、而して表現することを生命として必ずしも實行を要求しない。トルストイが愛と勞働とを人生の根本義と解し、みづから農民の間に交はつて實踐躬行した時、人は彼を崇めて宗教的藝術家といつた。人生最大の藝術は、最も崇高に生きることでなくてはならぬ。此の意味に於て、我々はルナンと共に云ふ。

「世界最大の藝術家はキリストである。」

故に歸着するところ、藝術家と雖も一般人間に要求せられる言行を拒否するわけに行かない。殊に最近の傾向の、身を以て藝術を作らんとする方向に進みつゝあることは注目に値ひする。

（文學概論）

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學名譽教授
國學院大學長
昭和二年薨
年六十一

一三　月雪花

芳賀矢一

赫々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の明月休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は仰いで見る事も出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出づれば、群陰皆影を伏して、大小の有象・無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴なはない清冷の光である、皎潔・無垢・崇美とたゝふべき優しい光である。休息安靜の夜に最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として涌く。書の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に

うちむかふ
荷田春滿の女著生子の歌

終日の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の影、寒地の氷の家、眺める人の心は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影の、千草の露の玉、毎に宿るやうなものである。「うちむかふ月は一つの影ながらうかぶはちゞの思なりけり」である。

月（長澤蘆雪筆）

東西古今、悲喜哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。之を嗟嘆し之を吟詠した詩歌は、世界各國の言語にみちゝて居る。天文學者は云ふ「月は地球の衞星で、全く死んだ冷塊である。」と。この冷たい光が、古往今來、どれ程の暖みを人間に與へたか、又、與へつゝあるか。月は永久

花ならば
花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪ふるみ吉野の山（僧仙覺）によるか。
三千世界
宋の僧劉師道の句

に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。その純潔の色を以て貧富貴賤の差別なく乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや「花ならば咲かぬ梢もまじりなむなべて雪降るみ吉野の山」といふやうに、眼に入るもの悉く、その下に包まれてしまふ。「三千世界銀色をなし、十二樓臺玉層を作す。」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來る、この純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、またゝく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花・紅葉色々のながめはもとより美しいに相違ない、又、花の散つた後の新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡くしたものではあるまいか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程樂しいものではなからう。

雪（伊藤若沖筆）

雪に埋れた銀世界が終つて再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさま〴〵、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、

咲亂れるのは、人世としてはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に馨しい香さへもつて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の樣なものの花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生ずるのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ樣に一文錢を要せぬのである。人世に花なくんばいかばかり寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の內にも、床の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を離れぬのである。月・雪のながめはその皎潔を愛し、その淸淨を貴ぶが、花はその艷麗・華美を以て人世を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々しい・華美・華麗・華奢等の語は、皆花に基づいた

花をし見れば
年ふれば齡は老いぬ
しかはあれど花をし
見れば物思もなし
（藤原良房）

山櫻
康資王の母の歌

冬ながら
清原深養父の歌

語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯「花をし見れば物思もなし。」といふ古歌を以て、一切を總括し得べしと信ずる。

花　（森寬齋筆）

月・雪・花三つのながめは、各、其の特長がある。いづれを前、いづれを後といふことが出來ぬ。

山ざくら花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむら
ぎえ

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあ

笠は重し
謠曲葛城の句
笠ハ重シ吳山ノ雪。
鞋ハ香シ楚地ノ花。
他年禪室ヲ訪フ。寧
ゾ路岐ノ賒カナルヲ
憚ラン。（宋の僧可士）

アイスランド
Iceland
北大西洋中の島

るらむ

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪。　鞋はかんばし、楚地の花。　肩上の笠には無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。　花を賞して月を愛せぬ人は無い。　月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。　一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は卽ち人の家である。　この地の人には、寸紅の、目を樂しませるものは無い。　又、之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。　一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見ることがない。　瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して夜ふけを知らぬ繁華な倫敦の住民も秋

世々を經て
伊藤仁齋の歌

年々歲々
唐の劉廷芝の詩句

冬の半年は美しい月の光を見ることが出來ない。　われら日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歷史が加はつて一層の感興が增す。

世々を經てながめし人の數にまたわれをもゆるせ秋の夜の月

月は古來の歷史を照らす鏡である。

年々歲々花相似たり。　歲々年々人同じからず

鬢の霜、頭の雪。　人生の感は花を見て益〻繁く、雪を見て愈〻深い。

二千五百年以來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。（月雪花）

賀茂眞淵
江戸時代の國學者
國學四大人の一人
荷田春滿の門人
家の號は縣居
明和六年(一七六九)歿
年七十三

此の秋
元文五年(一七四〇)
眞淵四十二歳の時妻子は濱松に殘し置きて江戸に出で同五年七月歸鄉せる時の日記

一四　岡部日記

賀茂眞淵

あはれ都にありつる程はあからさまながら年のはに故鄉に歸りなどしければ、さのみもあらざりしを、今は、たやすくも歸るまじく思ひなしつれば、千里のをちに老いたるたらちねをおきまつりて、とみの事ありともいかでか知らむ。知るともいかでかとみに行きいたらむ。今やいかなることかあらむ。いかなる心にかますらむなど、人やりならぬ胸騷がれつること、日ごとにありしを、世のさがはあはれなるものにて、うつたへに忘るとはあらねども、友垣もいで來て高き卑しき往きかひしけるに、二つなき心の紛れやすくして過しぬ。此の秋はいざなふ人さへあれば、いでや母をもをがみ、妻子・はらからにもあはばやとて、後の

驛
東海道藤澤宿
今の神奈川縣高座郡藤澤町
よろぎがいそ
淘綾磯
畑
神奈川縣足柄下郡湯本村畑宿
湯本より箱根の舊街道を登つて六粁ほどの處
箱根宿と湯本宿との間の宿

蠶叢
見ルナラク蠶叢ノ路。崎嶇トシテ行キ易カラズ。(唐ノ李白)

七月八日つとめて立ちいづ。

つとめて驛をたつ。夜の雨に道いとあしくて、從者わぶめり。大磯・小磯といふわたりは、よろぎがいそなるべし。夕つけて箱根山にかゝる。關までは苦しとて畑といふ處にやどる。いとはや夜寒なれば寐もいらぬに、瀧の音、鹿の聲うちこめたる山の秋風聞きあかされて立出でぬ。ほの〴〵と明けゆく山のかひよりかへり見れば、朝霧白く立渡れるは海を見む心ちす。關越ゆるほど日さしのぼりて湖面のどかに見わたさる。かなたこなた山をめぐれる水のつらは三巴といふや似つらむ。蠶叢に擬したる人はたればかりなるや。其の後いくそばくの人かのぞみ見けむ。此の湖にさせる聞えなきぞあやなき。

岡部
遠江國敷智郡岡部郷
今の濱松市の在淺場
村伊場
賀茂社の神領であつ
たといふ

門に倚りて
其ノ母曰ク女朝ニ出デテ晩ニ來レバ則チ吾門ニ倚リテ望ム
（戰國策）

夕つけて天龍川渡る。昔の歌には天の中川とぞよみたる。人人迎へにとて來つゝ老人の事なき由まづ云ひて、いとめづらしと思ひたるけしきどもも嬉しくて、

賀茂眞淵

まれに渡る天の中川なかなかにうれしき瀨にも袖ぬらしけり

暮過ぐるほど岡部の家にいたる。まことに門に倚りて待ちうけ給ふ。いときなき姪どもなど馳せきたれども、見知らぬかほなればにやあらむ、とみにもむつれず。馴れしばかりの人々は、髮のよもぎは似ずなりぬめれど、國ぶりの詞のみやしるかりけむ、いづれの處よりとは問はざりける。妻なる人はたはやすく來べからぬ故あれば、先づ子をおこせたるに、年比へて見るにおよずけにたるぞうれしき。誠のいたれることとて、懷かしく嬉しと思へるけはひもあはれなり。常は親しからぬさへ訪ひ來て日に〳〵語らふに、庭の蓬も露乾くひまのありげなり。

限りあれば明日は立ちなむとするに、妻子のまどひ來て、くれぐれと名殘をしむに、身ながら心に任せねば、人やりならぬ別れ路こそわりなくかなしけれ。妻なるものの手習のやうに書きつけたるをとりて見れば、

あふからにわかれむことをもわすられてうれしかりしぞ

人やり
人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ
（古今集、源さね）

今はくやしき

とおもふ心をつぶ〳〵とつゞけたるもなか〳〵にて、われもただごとに、

あふからにわかるゝうさはありながらまたもこじとはえこそおもはね

濱松の名をたのめばこりずまの海ならでと書きさしぬ。此の外にもありつれど、たちのいそぎにもらしつ。十一日曉にたちいづ。來む年また歸らむことをいひて、

こむとしと言にはやすく契れどもおもへばとほき月日なりけり

海山をだにいくへともなく越えさからむかなしさ、老人のかなしみ給ふにそへて妻子はらからの名殘とりあつめたるわが心

十一日
八月の

のうち言はむかたなきに、胸つとふたがりて、送りにしたひ來たる人々に物もえいはず。（賀茂眞淵全集——岡部日記）

本居宣長
江戸時代の國學大家
國學四大人の一人
眞淵の門人
家の號は鈴屋
伊勢國松阪生
享和元年（一八〇一）歿
年七十二

一五　おのが物まなびのありしやう

本居宣長

おのれいときなかりしほどより、書を讀むことをなむ、よろづよりもおもしろく思ひて讀みける。さるははか〴〵しく師につきて、わざと學問すとにもあらず、なにと志すこともなくそのすぢと定めたるかたもなくて、たゞからのやまとのくさ〴〵の書を、あるにまかせ、得るにまかせて、古き近きをもいはず、何くれと讀みけるほどに、十七八年なりしほどより歌詠ままほしく思ふ心いできて、詠みはじめけるを、それはた師に從ひて學べるにも

あらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集どもも、古き近きこれかれと見て、かたの如く今の世の詠みざまなりき。

父
小津三四右衛門定利
江戸にありし家のなりはひ
江戸大傳馬町にあつた木綿問屋の業

百人一首の改觀抄
僧契沖の著した百人一首の註釋書
五卷

契沖
難波の圓珠庵の僧契沖阿闍梨
元祿十四年(一三六一)寂年六十二

契　沖　(大阪圓珠庵所藏)

かくて二十あまりなりしほど、學問しにとて、京になむ上りける。さるは十一の歳父に後れしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、醫師のわざを習ひ、又そのために世の常の儒學をもせむとてなりけり。さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人に借りて見て、始めて契沖といひし人の說を知り、その世に勝れたるほどを

餘材抄
古今集の註釋
二十卷

勢語臆斷
伊勢物語の註釋
五卷

冠辭考
賀茂眞淵の著した枕詞の解釋書
十卷

も知りて、この人の著したるもの、餘材抄・勢語臆斷などを始め、その外も次々に、求め出でて見けるほどに、すべて歌學びのすぢのよきあしきけぢめをも、やう〳〵に辨へさとりつ。さるまゝに今の世の歌よみの思へるむねは大方心にかなはず、その歌のさまもをかしからず覺えけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみにこゝかしこの會などにも出でまじらひつゝ詠みありきけり。さて人の詠むふりはおのが心にはかなはざりけれども、おのがたてて詠むふりは今の世のふりにも背かねば、人は咎めずぞありける。そはさるべきことわりあり。別に言ひてむ。

さて後、國に歸りたりし頃江戸より上れりし人の近き頃出でたりとて冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居の大人の御名を

も始めて知りける。かくてその書はじめに一わたり見しには
さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこと遠く怪しきやう
に覺えてさらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべ
しと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれ〳〵にはげにさも
やと覺ゆるふし〴〵も出できければ、又立ちかへり見るに、いよ
いよげにと覺ゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出で
きつゝ、遂に古ぶりのこゝろことばの、まことに然る事をさとり
ぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説（ときごと）はなほい
まだしきことのみぞ多かりける。おのが歌學びのありしやう、
おほかたかくの如くなりき。
さて又道の學びは、まづはじめより神書といふすぢのもの古き
近きこれやかれやと讀みつるを、はたちばかりのほどよりわき

て志ありしかど、とりたててわざと學ぶ事はなかりしに、京に上
りてはわざとも學ばむと志はすゝみぬるを、かの契沖が歌ぶみ
の説になずらへて皇國の古の意を思ふに、世に神道者といふも
のの説くおもむきはみないたく違へりと早くさとりぬれば、師
と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむね
を考へ出でむと思ふ志深かりしに合はせて、かの冠辭考を得て
かへす〴〵讀み味はふほどに、いよ〳〵志深くなりつゝ、この大
人を慕ふ心日にそへてせちなりしに、一年この大人、田安の殿の
仰せ事を承り給ひて、この伊勢の國より大和・山城などこゝかし
こと尋ね巡られしことの有りし折、この松阪の里にも二日三日
とゞまり給へりしを、さることつゆ知らで、後に聞きていみじく
口惜しかりしを、かへるさまにも又一夜宿り給へるをうかゞひ

田安の殿
田安中納言德川宗武
德川吉宗の第三子
明和八年（一七七一）薨
年五十七

待ちていと〳〵嬉しく、急ぎ宿りにまうでて、はじめて見え奉りたりき。さて遂に名簿を奉りて、教を承ることにはなりたりきかし。（本居宣長全集――玉勝間）

名簿　中古貴人に謁見し又は師家に入門する時などその證として我が名を書きて奉るもの

芳宜園　橘千蔭　江戸の國學者　文化五年（二四六八）歿　年七十四

村田春海　江戸の國學者　文化八年（二四七一）歿　年六十六

縣居　賀茂眞淵の家の名

一六　芳宜園大人の靈を祭る

村田春海

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海、謹みて芳宜園の大人のおくつきのみまへに、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを燒きて、うなねつきて申さく。あはれ、かなしきかも。君はわれに十といひて一年のこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさに壯（さかり）の齢におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、あしたに參るとては、君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべに罷るとては、君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれること、親子はらからにもなにかことならむ。書よむとては、君を師ともたふとみ、歌つくるとては、われを弟ひのつらにぞ教へたまひける。中比にして、君は仕の道にいとなくおはし、われは世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕をしぞきたまひて後は、われも同じちまたに移り住めば、花を尋ぬとては、われ道しるべをなし、月を思ふとては、君が舟にあひのり、憂き事も共に愁へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざの、まめごとも、あだごとも、かたみにへだてなく、心をかはせること今に二十年。其の初をくりかへし數ふれば、あひ友たること、すでに五十とせにぞ餘りける。さるを、今後れたてまつりて、いつの世にか相見む、

いづれの時にか言問はむ。常なきは人の身の習ぞと知るも、これをいかでか歎かざらむ、かゝるをたれかはよく堪へむ。あはれ哀しきかも。

文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を棄てて古へに復り、青雲の高き心しらひをもとめ、賤機の文あるみやびごとをたふとみいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくるともがら、かれに泥み、こゝに牽かれて、猶怪しみ咎むるたぐひは多く、魂合ひてよく受けひく人なむ希なりしを、君ひとり心をおこしてあまねくさとし、廣くいざなひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人ははるかになびき來て、いにしへぶりの歌、世に盛になりにたるは、誠に君の力によりてなり。そのみづからよみ出で給へる歌を見るに、古き調、新らしき姿、と

くひぜを守る
宋人田ヲ耕ス者アリ。兎走リテ株ニフレ、頭ヲ折リテ死ス。因リテ其ノ耒ヲステ株ヲ守ル。復兎ヲ得ンコトヲ冀フ。兎復得ベカラズ。而シテ身宋國ノ笑トナル。（韓非子）

舟にきだつく
楚江ヲ渉ル者アリ。其ノ劍舟中ヨリ水ニ墜ツ。遽カニ其ノ舟ニ刻シテ曰ク。是吾ガ劍ノ墜チシ所ナリト。舟止ル。其ノ刻セル處ニ從ヒテ水ニ入リ之ヲ求ム。舟已ニ行キタレド劍行カザリキ。（呂氏春秋）

かくに備はらざるはなし。その古をうつせるは、藤原・寧樂の御世におよび、後のたくみにならへるは、堀河・鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は、口につくさざることなく、目に觸るゝものは、詞にのせざることなむあらざりける。これを見て、高きもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深く喜びける。しかるを今、黄金の聲たちまちやみて、玉の響ふたゝび聞えずなりぬるは、わがどちの嘆のみかは、大方の世の人の愁ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ。かゝるをたれかは慕はざらむ。あはれ哀しきかも。わがかくことあげするを、泉の下にもさやかに聞し召し、天がけりてもはるかにみそなはせとなむまうす。

上田秋成
國學者
文化七年（一八一〇）歿
年七十八
鎌倉の大將
源頼朝

一七　月の前

上田秋成

（琴後集）

文治それの年八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々御前おひ、御あとべつかうまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遲からず、つらを亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみたいまつれる人數多あるに、み前拂ひしてあなとだにいはせず、世にいかめしく貴き御有樣なり。歸り申して御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあなるが、見上げ奉るつらつき、なほ人ならずと思しけむ、御輿添の若侍して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる樣して、「雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて、「さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たる例に、誘ひ歸らむ。わがあとにつきて來れとい へ。」とて召連れさせ給へり。

穴熊の西伯將ニ獵セントシテ之ヲトス。曰ク、龍ニ非ズ、彲ニ非ズ、熊ニ非ズ、獲ル所ハ霸王ノ輔ナリト。果シテ呂尙ニ渭水ノ陽ニ遇ヘリ。（史記）

御館に入らせられ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照らしかゞやかせ給ひて、おまし近き處の一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔藐姑射の山の宮仕せし人の、世をはかなきものに思ひなして、身は黑くやつしたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。弓取る人のもとの心の猛きには、詠む歌も直くあからさまにと聞くはまことか。武士のあら〳〵しき心には詠みうつし得まじきものに宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛・鼓の音、

大風起り
大風起リテ雲飛揚ス。威海内ニ加ハリテ故郷ニ歸ル。（漢の高祖）
烏鵲南に
月明カニ星稀ニ、烏鵲南ニ飛ブ。（魏の曹操）

馬の嘶きは物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには心の後るゝはいかに。「こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢執らして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まむとては、益荒雄心を取隱し、あてになよびかにのみ詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき累なれ。君がさとくたけき御心のまゝに打出で給はむには、今の人誰かは立ちあへ奉らむ。三尺の劔を執りて『大風起り、雲飛揚す。』とうたひ、槊を横たへて、『烏鵲南に』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。」と云ふ。「人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれどたのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは世にいみじき弓矢の上手となむ聞ゆる。傳へた

疽を吮ふ
衛の吳起
竈を減ず
齊の孫臏

ることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。」「こは益、恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの痩法師にさへ物問はせ給ふことのかたじけなさよ。對ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなど聞え奉るべうも覺え侍らず。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年纔かに二十三にて家を出でたるいたづらものの、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、『賞を重くし、罰を輕くせよ。』といひしと、『任ずる者を辱むれば危し。』といひしとのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、誠の情よりとも覺え侍らず。竈を減じて人を危きに陷るゝは、將帥のさ

かしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出し給へることの、あやしきまでかしこくませるを、餘所ながら見聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ。」とて、額を板敷に摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、「口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してむ。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばむ。まれ人は酒飲まざるべし。鹿猿のなかに立交りて歌よめといふともよむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷やかなるにも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、暖にもこそ。この火取、法師に參らせよ。」とて、白銀もてつくりたる猫のかたちしたるを、取傳へて、君より賜ふとて、前に置きたり。「鹿猿は尙心たけし。鼠をだにえとらぬ痩法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」と

て、三度おしいたゞきぬ。

あした御暇たまはりて立ちいづるに、御館の人やどりに、誰が殿のわらはべならむ、くゝり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせむ。火埋みて手足煖めよ。」とて、かのきらきらしき物を與へて、かへり見もせず立ちさりぬ。童が主なる人、「いと怪し。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童には得させけむ。」とて、まづ急ぎて、聞え奉る。君うちゑみ給ひ、「かの法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけむ、わが門の前に捨てゆきつるよ。法師とて、男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出でて、なほ身を守り、才に誇りて野山にまじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取らせよ。」とて、とりお

漢高　漢の高祖劉邦
曹孟德　魏の曹操　孟德はその字

心なき身にも
心なき身にもあはれは知られけり鴫立澤の秋の夕暮　（西行法師）

北村透谷　文學者　名は門太郎　神奈川縣生　明治二十七年歿　年二十七

ろさせ給ひぬ。西行、後にこのことを人に語りていふ「右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふものを生れながら得させけむ。唯悲しむべきは、神の御裔の、この後やう〳〵衰へさせ給はむ世の姿なるは。」とて、涙とゞめ難くして物語りしとなむ。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、うちひそみぬべし。

（籐簍冊子）

一八　山庵雜記

北村透谷

夢見まほしやと思ふ時、あやにくに夢のなき事あり。夢なかれと思ふ時、うとましき夢のもつれ入る事あり。寤むる時亦かくの如し。意はざらんと思ふに意ひ、意はんと思ふに意はず。さりとて、意の如くならぬをば意の如くせましと思ふにもあらず。靜かに傾き盡きなんとする月を見れば、よろづ意のまゝにならぬものぞなき。徐ろに咲出づらん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞなき。如意却つて不如意、不如意却つて如意。悲しむも何かせん、歡ぶも何かせん。無心を傭ひ來つて、悲しみをも歡をも同じ意界に放ちやりてこそ、まことの樂しみは來るなれ。

早曉臥床を出でて、心は寤寐の間に醒め、意は意・無意の際にある時、一鳥の弄聲を聽けば、忽として我、天涯に遊び、忽として我、塵界に落つる感あり。我に返りて後其の聲を味はへば、凡常の野雀

のみ。然るに我が得たる幽趣は地に就けるものならず。此に於て私かに思ふ、感應我を主として他を主とせざることを。

世にありがたき至實は涙なるべし。涙なくては情もなからん、涙なくては誠もなからん。狂ひに狂へるバイロンには涙も細繩程の役に立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繫ぎ留むるものは此の實なるべし。情差ひ歡薄らぎたる間柄を緊め固うするもの、涙の外には求め難し。人生に涙あるは原頭に水あるが如し。世間若し涙を神聖に守る技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、いたく悲しき事は跡を絕つに幾からんか。

沙翁　シェクスピヤ　Shakespeare (1546—1616)　英國の大詩人　大戯曲家

「粗く斫られたる石にも神の定めたる運あり。」とは沙翁の悟道なり。靜かに物象を觀ずれば、物として定運なきはあらず。誰か恨むべき神を知りそめたる、誰か喞つべき佛を識りそめたる。心を物外に抽かんとするは未だし、物外・物內何すれぞ悟達の別を畫かん。運命に默從し、神意に一任して、こゝに始めて眞悟の域に達せんか。

他を議せんとする時、最も多く己の非を悟る。頃者激する所ありて、生來甚だ好まざる駁擊の文を草す。草し畢りて靜かに內省するに、人を難ずる筆は同じく己を難ぜんとするに似たり。是非曲直輕々しく判じ難し。如かず、修養練磨して叨りに他人の非を測らざることをつとめんに。

「大いなる『悔改』はまた一個の大信仰なり。罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし。」とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明日の是を期するは信仰に入る要諦にして、罪人の必ず自殺すべしとせざるは、これを以てなり。罪の重荷はいつまでも重荷なり。「悔改」の生涯は卽ち信仰の生涯なるか。

（北村透谷集）

一九　愚禿親鸞

西田幾多郎

親鸞
淨土眞宗の開祖
弘長二年（一二六三）寂
年九十

西田幾多郎
哲學者
文學博士
京都帝國大學名譽教授
明治元年金澤市生

余は眞宗の家に生れ、余の母は眞宗の信者であるに拘らず、余自身は眞宗の信者でもなければ、また眞宗に就いて多く知るものでもない。たゞ上人が在世の時、自ら愚禿と稱し、此の二字に重きを置かれたといふ話から、余の知る所を以て推すと、愚禿の二字は能く上人の人となりを表すと共に、眞宗の教義を標榜し、兼ねて宗教その者の本質を示すものではないかと思ふ。

親鸞（西本願寺所藏）

人間には智者もあり、愚者もあり、不德者もある。併しいかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人間の德は人間の德である。三角形の邊はいかに長くとも、總べての角の和が二直角に等しいといふには何の變りもなからう。たゞ翻身一回、此の智、此の德を捨てた所に、新な智を得、新な德を具へ、新な生命に入る事ができるのである。是が宗教の神髓で

ある。宗教のことは世の所謂學問・知識と何等交渉もない。コペルニクスの地動説が眞理であらうが、トレミの天動説が眞理であらうが、さういふ事はどちらでもよい。德行の點から見ても、宗教は自ら德行を伴なひ來るものであらうが、また必ずしも此の兩者を同一視することは出來ぬ。昔、融禪師が牛頭山の北巖に棲んで居た時には色々の鳥が花を啣んで供養したが、四祖大師に參じてから鳥が花を啣んで來なくなつたといふ話を聞いたことがある。宗教の智は智そのものを知、宗教の德は德そのものを用ひるのである。三角形の幾何學的性質を究めるには、紙上の一小三角形で澤山であるやうに、心靈上の事實に對しては、英雄豪傑も匹夫匹婦と同一である。たゞ眼は眼を見ることは出來ず、山にある者は、山の全體を知ることは出來ぬ。此

コペルニクス
Copernicus (1473—1543)　現在の天文學の開祖　プロシヤ人
トレミ　Ptolemy　西紀二世紀の前半ごろのアレキサンドリヤの人　文學者　地理學者　數學者
融禪師　法融　四祖大師に攝せられて牛頭山法といふ一派を開く
牛頭山　中華民國江南の潤州にある禪寺
四祖大師　道信　中華民國の禪宗第四世の祖

の智、此の德の間に頭出頭沒する者は、此の智、此の德を知ることは出來ぬ。何人であつても、赤裸々たる自己の本體に立返り、一たび懸崖に手を撒して絶後に蘇つたものでなければ、之を知ることは出來ぬ。即ち深く愚禿の愚禿たる所以を味はひ得たものみ之を知り得るのである。上人の愚禿はかくの如き意味の愚禿ではなからうか。他力といはず、自力といはず、一切の宗教は此の愚禿の二字を味はふに外ならぬのである。

かくいへば、愚禿の二字は獨り眞宗に限つた譯でもない樣であるが、眞宗は特に此の方面に着目した宗教である、愚人・惡人を正因とした宗教である、絶對的愛・絶對的他力の宗教である。いかなる愚人、いかなる罪人に對しても、彌陀は唯汝の爲に我は粉骨碎身せりといつて、之を迎へられるのが眞宗の本旨である。

吉水一門　東山の吉水で淨土宗を說いた源空卽ち法、然上人の門弟たち

北國の隅に　親鸞は承元元年（一八〇七）越後に流され五年目に漸く赦された

島崎藤村　詩人　文學者　名は春樹　明治五年長野縣木曾生

終りに宗祖其の人の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣冲天、他宗を罵倒し、北條氏を目して、「小島の主等が云々。」と壯語したのに比べて、吉水一門の奇禍に連なり、北國の隅に流されながら「若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん。」といつて、法を見て人を見なかつた親鸞上人の人格は、頗る趣を異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤澎湃の間に立つて、動かざること巖の如き日蓮上人の意氣も壯なことは壯ではあるが、煙波縹渺、風靜かに波動かざる親鸞上人の胸懷は、また何となく奥床しいではないか。（思索と體驗）

二〇　嵐の後

島崎藤村

いよ〳〵次郎の、家を離れて行く日も近づいた。次郎はその日を茶の間の緣先にある黑板の上に記しつけて見て、何となく名殘が惜しまれるといふ風であつた。やがて、荷造りまでも出來た。この都會から田舍へ歸つて行く子を送る前の一日だけが殘つた。

次郎　作者の次男　名は雞二

ライス、カレー　Rice Curry

お德は茶の間を往つたり來たりして、次郎の「送別會」の支度を始めた。さういふお德自身も遠からず暇を取つて、代りの女中のあり次第に國許の方へ歸らうとしてゐた。

旦那さん、お肴屋さんがまゐりました。旦那さんの分だけ何か取りませうか。次郎ちやんたちはライス、カレーがいゝさうですよ。

「ライス、カレーの送別會か。どうしてあんなものがさう好きなんだらうなあ。」

三ちやん　作者の三男　名は蓊助
末子　作者の四女　名は柳子

おまいか　お前掛の意

「だつて、皆さんがさうおつしやるんですもの。――三ちやんでも、末子さんでも。」

私はお徳の前に立つて、肴屋の持つて來た附木にいそがしく目を通した。それには河岸から買つて來た魚の名が並べ記してある。長い月日の間、私はこんな主婦の役をも兼ねて來て、好き嫌ひの多い子供等のために毎日の惣菜を考へることも日課の一つのやうになつてゐた。

「待てよ。俺はどうでもいゝが、送別會のお附合ひに鮎の一尾も貰つて置くか。」

と私はお徳に話した。

「末ちやん、おまいか。」

と私はまた小さな娘にでも注意するやうに末子に言つて、白の

信濃の山地　長野縣西筑摩郡神阪村
太郎　作者の長男　名は楠雄

前掛をかけさせ、その日の臺所を手傳はせることも忘れなかつた。

茶の間には古い柱時計の外に、次郎が銀座まで行つて買つて來た新しいのも壁の上に懸けてあつた。信濃の山地に居る太郎への約束の柱時計だ。今度次郎が提げて行かうとするものだ。それが古い時計と並んで一緒に動きはじめてゐた。

「凄い時計だ。」

と見に來て言ふものがある。そろ〳〵夕飯の支度が出來る頃には、私たちは茶の間に集つて新しい時計の形をいろ〳〵に言つて見たり、それを古い方に比べたりした。私の四人の子供がまだ生れない前からあるのも、その古い方の時計だ。

やがて私たちは一緒に食卓に就いた。次郎は三郎とむかひ合

ひ、私は末子とむかひ合つた。「送別會」とは名ばかりのやうな粗末な食事でも、かうして三人の兄妹の顔が再び揃ふのはこの先何時のことかと思はせた。

「いよ〳〵明日は次郎ちやんも出かけるかね。」

と私は古い時計を見ながら言つた。

「母さんが亡くなつてから、今年でもう十七年にもなるよ。あの母さんが生きてゐて、お前たちの話す言葉を聞いたら驚くだらうなあ。『時計を買ひやがつた。――動いてゐやがらあ。』――お前たちのはその調子だもの。」

「いけねえ、いけねえ。」

と次郎は頭をかきながら食つた。

「父さんがそんなことを言つたつて、みんなが、さうだから仕方がない。」

と三郎も笑ひながら食つた。

「さう言へば、次郎ちやんも一年に二度ぐらゐづつは東京へ出ておいでよ。なにも田舎に引込みきりと考へなくてもいゝよ。二三年は旅だと思つて御覽な。父さんなぞも旅をする度に自分の道が開けて來た。田舎へ行くと、友だちはすくなからうなあ。殊に畫の方の友だちが――それだけが父さんの氣懸りだ。」

かう私が言ふと、今まで子供の友だちのやうにして暮して來たお徳も長い奉公を思ひ出し顔に、

「次郎ちやんが行つてしまふと、急にさびしくなりませうね。人を送るのもいゝが、わたしは後がいやです。」

Radio ラヂオ

と給仕しながら言つた。

「あゝ、食つた。食つた。」

間もなくその聲が子供等の間に起つた。三郎は口を拭いて、そこにある簞笥を背に足を投出した。次郎は床柱の方へ寄つて、自分で裝置したラヂオの受話器を耳にあてがつた。細いアンテナの線を通して傳はつて來る都會の聲も、その音樂も、當分は耳にすることの出來ないかのやうに。

その晩は、お德も名殘を惜しむといふ風で、臺所を片附けてから子供等の相手になつた。お德は賑やかなことの好きな女で、戯に子供等から腕押しでも所望されると、いやだとは言はなかつた。肥つて丈夫さうなお德と、痩せぎすで力のある次郎とはおもしろい取組を見せた。さかんな笑聲が茶の間で起るのを聞くと、私も自分の部屋にじつとしてゐられなかつた。

「次郎ちやんと姉やとは互角だ。」

そんな事を言つてゐる三郎たちの側で、また二人は勝負を爭つた。健康そのものとも言ひたいお德が肥つた膝を乘出して、腕に力を入れた時は、次郎もそれをどうすることも出來なかつた。若々しい血潮は見る〳〵次郎の顏に上つた。堅く結んだ手も震へた。私はまたはら〳〵しながらそれを見てゐた。

「おゝ、痛い。お覽なさいな、私の手はこんなに紅くなつちやつたこと。」

とお德は血でもにじむかと見えるほど紅く熱した腕をさすつた。

「三ちやんも姉やとやつて御覽なさいな。」

と末子が側から勸めたが、三郎は應じなかつた。

「僕はよす。左ならやつて見てもいゝけれど。」

さういふ三郎は左を得意としてゐた。腕押に、カルタにその晩は笑聲が盡きなかつた。

翌日は最早新しい柱時計が私たちの家の茶の間に懸つてゐなかつた。次郎はそれを厚い紙箱に入れて、旅に提げて行かれるやうに荷造りした。

その時になつて見ると、太郎はあの山地の方で既に田植を始めてゐる。次郎はこれから出掛けようとしてゐる。お德もやがては國をさして歸らうとしてゐる。次郎のゐない後は、にはかに家も寂しからうけれど、日頃せゝこましく窮屈にのみ暮して來た私たちの前途には、いくらかの部屋のゆとりのある日も來

Carta カルタ

さうになつた。私は私で、もう一度自分の書齋を二階の四疊半に移し、この次は客としての次郎を吾が家に迎へようと思ふなら、それも出來ない相談ではないやうに見えて來た。

私は獨りで、例の地下室のやうな四疊半の窓へ近く行つた。そこいらはもうすつかり青葉の世界だつた。私は兩方の拳を堅く握りしめ、それをうんと高く伸ばし、大きな欠伸を一つした。

「大都會は墓地です。人間はそこには生活してゐないのです。」

これは日頃私の胸を往つたり來たりする、あるすぐれた藝術家の言葉だ。あの子供等のよく遊びに行つた島津山の上から、芝・麻布に連なり續く人家の屋根を望んだときの嘗ての自分の心持をも思ひ合はせ、私はさういふ自分自身の立つ位置さへもが——あの藝術家の言草ではないが、いつの間にか墓地のやうな

氣のして來たことを胸に浮べて見た。過ぐる七年のさびしい嵐は、それほど私の生活を行詰つたものとした。

私が見直さうと思つて來たのも、その墓地だ。そしてその墓地から起上る時が、どうやら、自分のやうなものにもやつて來たかのやうに思はれた。その時になつて見ると、「父は父、子は子」でなく、「自分は自分、子供は子供等」でもなく、ほんたうに「私たち」への道が見えはじめた。

夕日が二階の部屋に滿ちて來た。階下にある四疊半や茶の間はもう薄暗い。次郎の出發にはまだ間があつたが、纏めた荷物は二階から玄關のところへ運んであつた。

「さあ、これだ、これが僕の持つて行く一番のお土產だ。」

と次郎は言つて、すつかり荷ごしらへの出來た時計をあちこち

四方木屋　作者が太郎の住居に與へた家の名　信濃國西筑摩郡神阪村にある

と持廻つた。

「どれ、わたしにも持たせて見て。」

と末子は兄の側へ寄つて言つた。

遠い山地も、にはかに私たちには近くなつた。この新しい柱時計が四方木屋の爐邊に懸つて音のする日を想ひ見るだけでも、樂しかつた。日頃私が矛盾のやうに自分の行爲を考へたことも、今はその矛盾が矛盾でないやうな時も來た。子のために建てたあの永住の家と、旅にも等しい自分の假の借家住居の間には、虹のやうな橋が懸つたやうに思はれて來た。

「次郎ちやん、停車場まで送りませう。末子さんもわたしと一緒にいらつしやいね。」

とお德が言出した。

「僕も送つて行くよ。」

と三郎も言つた。すると次郎は首を振つて、

「誰も來ちやいけない。今度は誰にも送つて貰はない。」

それが次郎の望らしかつた。私は末子やお德を思ひとまらせたが、せめて三郎だけをやつて、飯田町の停車場まで見送らせることにした。

飯田町の停車場
中央線の汽車の起點

やがて、そこいらはすつかり暗くなつた。まだ宵の口から、家の周圍はひつそりとして來て、坂の下を通る人の跫音もすくない。都會に住むとも思へないほどの靜かさだ。氣の早い次郎は出發の時を待ちかねて、住慣れた家の周圍を一廻りして歸つて來たくらゐだ。

「行つてまゐります。」

和辻哲郎
哲學者
文學博士
京都帝國大學教授
明治二十二年兵庫縣生

茶の間の古い時計が九時を打つ頃に、私たちはその聲を聞いた。植木坂の上には次郎の荷物を積んだ車が先に動いて行つた。いつの間にか次郎も家の外の路次を踏む靴の音をさせて、靜かに私たちから離れて行つた。（嵐）

二一　家

和辻哲郎

家は家族の全體性を意味する。それは家長に於て代表せられるが、しかし家長をも家長たらしめる全體性であつて、逆に家長の恣意により存在せしめられるのではない。特に家の本質的特徵をなすものは、この全體性が歷史的に把捉せられてゐるといふ點である。現在の家族はこの歷史的な家を持つてゐるのであり、隨つて過去・未來に亙る家の全體性に對し責任を負はね

ばならぬ。家名は家長をも犧牲にし得る。だから家に屬する人は親子・夫婦であるのみならず、更に祖先に對する後裔であり、後裔に對する祖先である。家族の全體性が個々の成員よりも先であることは、この家に於て最も明白に示されてゐる。このやうな家が日本の人間の存在の仕方として特に目立つものであることは、家族制度が日本の淳風美俗として力說せられることによつても知られる。しかしその特殊性はどこにあるであらうか。またこの特殊な存在の仕方は、家族制度がすたれて行くと共に消滅し去るやうなものであらうか。

夫婦の間・親子の間・兄弟の間が先づ第一に全然、隔てなき結合を目ざすところのしめやかな情愛である。素樸な古代人は夫婦喧嘩や嫉妬を物語るに際してすでにこのやうな隔てなき家族

憶良　山上憶良

熊谷蓮生坊　熊谷直實

の情愛を示してゐる。更に萬葉の歌人憶良の

しろがねも黃金も玉もなにせむにまされる寶子にしか
めやも

の絕唱は日本人の心を言當てたものとして、永く人口に膾炙してゐる。憶良の家族的情愛はかの罷宴の歌に於て更に一層直觀的に現はれる。

憶良等は今は罷らむ子哭くらむその子の母も吾を待つらむぞ

このやうなしめやかな情愛は大きい社會的變革を惹起した鎌倉時代の武士にも見ることが出來る。熊谷蓮生坊の轉心は子に對する愛情に基づくと傳へられ、更に足利時代の謠曲に於ては、親子の情は最も根源的な深い力として描かれてゐる。德川

時代の文藝が人の涙を絞らうとする時にこの親子の情を使つた事は言ふまでもない。あらゆる時を通じて、日本人は家族的な間に於て利己心を犧牲にする事を目ざしてゐた。自他不二の理念はこの場面に於て比類なく實現せられてゐるのである。隨つて第二にそれはしめやかであると同時に激情的になる。情愛のしめやかさは單に陰鬱に沈んだ感情の融合ではなくして、横溢する感情を變化に於てひそかに持久させたものである。強い感情が燻しをかけられて靜かな形に現れたものである。だから隔てなき結合を目ざす力は表面の靜かさにも拘らずその底力に於て極めて烈しい。利己心の犧牲も、單に便宜上必要な程度に止るのではなくして、あくまでも徹底的に遂行せられようとする。そこで障礙に逢ふ毎にしめやかな情愛は激して熱情的になる。それは家の全體性の故に個人を壓服しきるほどの強い力を持つてゐる。だから第三に家族的な間は生命を惜しまない勇敢な戰鬪的な態度となつて現れてくるのである。曾我物語に現れてゐるやうな親の仇討の思想が、いかに強く日本の民衆の血を涌かせたかがそれを示してゐる。親のために、また家名のために、人はその一生を犧牲にする。しかもその犧牲は當人にとつて人生の最も高い意義として感ぜられてゐたのである。家名のために勇敢であつた武士たちは皆さうであつた。家の全體性は常に個人より重いのである。隨つて第四に人は極めて恬澹におのれの命をも捨てた。親のため或は子のために身命を賭すること、或は家のために生命を捨てること、それは我々の歴史に於て最も著しい現象である。家族のため

に勇敢であることが必ずしも利己心に基づかず、隨つて執拗に生を欲するのでないといふことは、しめやかな情愛がすでに利己心の犧牲をふくむといふことによつても理解し得られるであらう。

かくして家としての日本の人間の存在の仕方は、しめやかな激情、戰鬪的な恬澹といふ如き日本的な間柄を家族的に實現してゐるに他ならぬ。さうしてまたこの間柄の特殊性がまさに家なるものを顯著に發達せしめる根據ともなつてゐるのである。何故なら、しめやかな情愛といふ如きものは、人工的・抽象的な視點の下に人間を見ることを許さず、隨つて個人の自覺に基づくところの、より大きい人間の共同態の形成には不適當だからである。そこで家なるものは日本に於ては共同態のなかの共同態として特に重大な意義を帶びてくる。それはまさに日本の人間の存在の仕方の特殊性なのであつて、それに基づいた家族制度といふ如き觀念よりも一層深い根柢的な位置を持つてゐる。家族制度が現代に於て德川時代の如く顯著に存せざることは何人も承認するところであらう。しかし現代の日本の人間の存在の仕方は、家を離れてゐるであらうか。ヨーロッパの近代資本主義は人間を個人として見ようとする。家族も亦經濟的利害による個人の結合として理解せられる。しかし資本主義を取入れた日本人は家に於て個人を見ず、個人の集合に於て家を見るやうになつたであらうか。我々は然りとは答へることが出來ぬ。

最も日常的な現象として、日本人は家を「うち」として把捉してゐ

る。家の外の世間が「そと」である。さうしてその「うち」に於ては個人の區別は消滅する。妻にとつて夫は「うち」・「うちの人」・「宅」であり、夫にとつては妻は「家内」である。家族も亦「うちの者」であつて、外の者との區別は顯著であるが、内部の區別は無視せられる。即ち「うち」としてはまさに隔てなき間柄としての家族の全體性が把捉せられ、それが「そと」なる世間と隔てられるのである。このやうな「うち」と「そと」の區別は、ヨーロッパの言語には見出すことが出來ない。室の内外、家の内外を云ふことはあつても、家族の間柄の内外を云ふことはない。日本語のうち・そとに對應するほど重大な意味を持つのは、第一に個人の心の内と外であり、第二に家屋の内外であり、第三に國或は町の内外である。即ち精神と肉體、人生と自然、及び大きい人間の共同態の對立が主として注意せられるのであつて、家族の間柄を標準とする見方はそこには存せぬ。かくてうち・そとの用法は日本の人間の存在の仕方の直接の理解を表現してゐるといつてよい。

かく言語に於て表現せられてゐることは同時に家の構造にも現されてゐる。即ち人間の間柄としての家の構造はそのまゝ家屋としての家の構造に反映してゐるのである。先づ第一に、家はその内部に於て隔てなき結合を表現する。どの部屋も隔ての意志の表現としての錠前や締りによつて他から區別せらるゝことがない。即ち個々の部屋の區別は消滅してゐる。たとひ襖や障子で仕切られてゐるとしても、それはたゞ相互の信頼に於て仕切られるのみであつて、それを開けることを拒む意志は現されて居らぬ。だから隔てなき結合そのものが襖・障子

による仕切を可能にするのである。しかし隔てなき結合に於てしかも仕切を必要とするといふことが、他方では隔てなき結合の含んでゐる激情性を現してゐるのである。隨つてそれは家の内部に於ける對抗性を示すと共に、またそれを悉く取拂つて一切の仕切のない恬澹な開放性をも實現することが出來る。第二に家はそとに對して明白に區別せられる。部屋には締りをつけないにしても外に對しては必ず戸締をつける。のみならずその外には更に垣根があり塀があり、甚だしい時には逆茂木や濠がある。そとから歸れば玄關に於て下駄や靴をぬぎ、それによつて外と内とを截然區別する。そとに對する隔てが露骨に現れてゐるのである。

かくの如き家が日本に於ては依然として存續してゐる。さうして單に外形的にのみならず生活の仕方をも規定してゐるのである。それが人間の存在の仕方としていかに特殊的であるかは、ヨーロッパのそれと比較することによつて明らかになる。ヨーロッパの家の内部は個々獨立の部屋に區切られ、その間は厚い壁と頑丈な戸とによつて隔てられてゐる。その戸は一々精巧な錠前によつて締りすることが出來、隨つてたゞ鍵を持つものみが自由に出入し得るのである。これは原理的に言つて個々相隔てる構造と云はねばならぬ。内外が第一に個人の心の内外を意味することは、家の構造に反映して、個別的な部屋の内外となるのである。だから部屋の戸口から出ることは、丁度日本に於て玄關から出ることと同樣な意味を持つ。室の中では、卽ち個人的には、眞裸でもよい。しかし室を出て家族の間

Opera オペラ

に加るときには、きちんとしてゐなくてはならぬ。一歩室を出れば、家庭内の食堂であると街の料理店であると大差はない。即ち家庭内の食堂がすでに日本の意味に於けるそとであると共に、料理店やオペラなども謂はば茶の間や居間の役目をつとめるのである。だから一方では日本の家に當るものが戸締りをする個人の部屋にまで縮小せられると共に、他方では日本の家庭内の團欒に當るものが町全體にひろがつて行く。そこには隔てなき間柄ではなくして、隔てある個人の間の社交が行はれる。しかしそれは部屋に對してこそ外であつても、共同生活の意味に於ては内である。町の公園も往來も内である。そこで日本の家の塀や垣根に當るものが、一方で部屋の錠前にまで縮小したと共に他方で町の城壁や濠にまで擴大する。日本の

Asphalt アスファルト

玄關に當るものは町の城門である。だから部屋と城壁との中間に存する家はさほど重大な意味を持たない。人は極めて個人主義であり隨つて隔てがあると共に、また極めて社交的であり隨つて隔てに於ける共同に慣れてゐる。即ちまさしく家に規定せられるといふことがないのである。

日本人は外形的にヨーロッパの生活を學んだかも知れない。しかし家に規定せられて個人主義的社交的なる公共生活を營み得ない點に於ては、殆ど全くヨーロッパ化してゐないと云つてよいのである。路面にアスファルトを敷いても、それが足袋はだしで出て行ける場所であると誰が感ずるであらうか。或はまた靴をはいても、そのまゝで疊の上にも上れるはき物であると誰が感ずるであらうか。即ち家の内と町の内との同視が

どこに存するであらうか。町をあくまでも家の外として感ずるかぎり、それはヨーロッパ的ではないのである。解放的な日本の家屋に住み得るかぎり、彼らは依然として家に規定せられてゐるのである。

かくして我々は家としての存在の仕方が特に顯著に國民の特殊性を示すことを承認しなければならぬ。ところで日本の人間がその全體性を自覺する道も、實は家の全體性を通じてなされたのである。人間の全體性は先づ神として把捉せられた。しかしその神は歴史的なる家の全體性としての祖先神に他ならぬものであつた。それは古代に於ける最も素樸的な全體性の把捉であるが、しかし不思議にもその素樸な活力が千何百年かを通じて活き續けてゐるのである。明治維新は尊皇攘夷といふ形に現された國民的自覺によつて行はれたが、この國民的自覺は日本を神國とする神話の復興にもとづき、この復興は氏神たる伊勢神宮の崇拜に根ざして居る。原始社會に於ける宗教的な全體性把捉が千何百年の後になほ社會變革の動力となり得たといふやうな現象は、實際、世界に類がないのである。だから明治時代に他の國民との戰爭に於て燃上つた國民的自覺さへも、覺者はそれ自身に於て理論づけようとはせず、依然として家の類推によつて說かうとしたのである。曰く、日本の國民は皇室を宗家とする一大家族である。國民の全體性は、同一祖先より出づるこの大きい家の全體性に他ならぬ。そこで國民は家の家となる。家の周りの垣根は國境にまで擴大せられる。家の內部に於けると同じく國民の內部に於ても隔てなき結合

が實現せられねばならぬ。家の立場に於て孝と呼ばれる德は、家の家の立場に於て忠と呼ばれる。だから忠孝は本質に於て一致する。それはいづれも全體性によつて個人を規定するところの德である。（教育科學）

新定女子國文　卷九終

昭和八年一月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和貳年九月廿五日印刷
昭和貳年九月廿八日發行
昭和三年一月廿四日訂正再版發行
昭和七年八月廿二日訂正三版印刷
昭和七年八月廿五日訂正三版發行
昭和八年一月九日訂正四版印刷
昭和八年一月十二日訂正四版發行

不許複製

新定女子國文
改訂版
【全十冊】

新制定價	
卷一・二・三・四	各金六拾參錢
卷五・六・七・八	各金六拾貳錢
卷九・十	各金五拾九錢
卷	各金五拾八錢

著作者　吉田彌平　東京市神田區神保町三丁目八番地
發行兼印刷者　金港堂書籍株式會社
代表者　原亮七郎
印刷所　日清印刷株式會社　東京市牛込區榎町七番地
發賣所　金港堂書籍株式會社　東京市神田區神保町三丁目八番地
振替貯金口座東京八八一五番